
報復

深皇玖 楸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

報復

【Nコード】

N2889D

【作者名】

深皇玖 楸

【あらすじ】

この街は異常だった。この街に生まれる子供も、この街に根付く風習も。どこまでも他者を疎外し、そうすることで守られ続けた風習。裏切り者への報復、その執行者は獣。それを人々は知っているが、誤解され続けてきた。香月綵菟は幼馴染みの親友・相良柚弥が事故死したことをきっかけに、疑問を抱き始めるが。 。 媽然と笑うのは、獣なのか、それとも。 。 近々改稿予定です。今しばらくお待ちを。…と書いてから一体…。すみません、落ち着いたら一気にリニューアルします。

プロローグ

始まりは、一体いつだったのだろうか。

誰も知らない。

ただ、気付けば彼の周りの人間は、何らかの形で消えていく。

誰もが疑った。

家族も親類も学校も町の人間も。

それでも、彼がやったわけでも、彼が悪いわけでもない。

成す術もないまま、一月に一本以上は、出席簿に横線が増えていく。

「はあ……。まったく、この歳で葬式慣れするなんて、侘しすぎるだろ」

制服である黒地に青のラインの入ったブレザーに、香典返し「しるし」の袋を持って、香月綵菟は薄暗い路地を歩く。

綵菟は灰色の曇天のなか、石を蹴りながら、亡くなった友人との思い出に、思いを馳せる。

『ねえ綵菟』

いつもそいつは俺を追いかけて、やさしい声で俺の名前を呼んだ。天真爛漫という言葉が、とても似合う、俺の生涯の親友。

『綵菟、綵菟。ボクね、睦瑳君ちかさが悪く言われるのは許せないよ。彼が何したの？ 獣だってそう。獣も悪くない。だから、彼とは絶対に離れない。獣も嫌うつもりないし、綵菟も同じ気持ちでいてくれるでしょう？』

そう言ったのは、ほんの三日前なのに。

そう。睦瑳は悪くない。あいつのせいでは、絶対にない。

「綵菟……」

沈んだ重低音の、かすれた声。惜しむらくは、その声に捨てられた子犬のような響きが混じっていることだろうか。

綵菟の頭上に広がる曇天のように、沈んだ重い心のまま、ぼんやりと思う。

「睦瑳？」

ああ。いつもそうだ。こいつは、悪くない。本当に真つ直ぐでいい奴なのだと、皆知っている。こいつでなければ、ここまで生きては来られなかっただろう。

綵菟は張り裂けそうな心の痛みと同調するようにして、自分と同じ格好をした睦瑳に笑いかける。

きつと自分には、それしかできることはないから。感情が半分麻痺したような自分とは、違う。綵菟には睦瑳が眩しかった。

「あの…… 柚弥のこと……」

柚弥。それが、昨日亡くなった綵菟の幼馴染みの名前だと気付くのに、長い時間がかかった。

相良柚弥さがら柚弥はもう、この世にはいない。

今さらながらに、その哀しみが押し寄せてくる。けれどもそれは、星の瞬きのように小さなものだ。いや、それだけでもあったことが不思議な位だ。

柚弥は綵菟の一番の親友で。親同士も親友で。睦瑳も同じで。三人で一緒に育ってきた。

どんなに歳をとってもずっとそれは変わらないのだと、根拠もないのに三日前まで信じていた。この町に蔓延る死が他人事ではないと、きちんと理解していた筈なのに。理解したつもりになって、その実、自分の力に驕っていたのかもしれない。

三日前の夜、柚弥が亡くなるその時まで

。

綵菟はその日、普通に部屋で読書をしていた。

あまりにも頻繁に人が亡くなるものだから、気持ちなんて浮かぶ筈もなく、この日綵菟が読んでいたのは『無情になりたくて』とい

う、悲しい話。

『どんなに貴方が好きだって、貴方は先に死ぬ。残された哀しみを癒す術を知らないから、無情になりたい。そうすれば悲しむこともない。後は時間が解決してくれる。貴方を好きだった気持ちも、貴方の思い出も、全部忘れられる……。私はこのまま貴方を忘れて平凡な生活を送るなんて器用な芸当、こうでもしなきゃできるわけないわ。私は悪いとは思わない』

死に逝く最愛の人へと送られるその手紙の言葉が、染み渡る。

綵菟は自覚していた。

自分がこんなベタな言葉にさえ反応してしまうほど、精神的に参っていることを。

それがまだ、綵菟が普通の人間の心を残している証拠であることも。

綵菟の両親もそれが解っているから、何も言わない。

けれど、睦瑳から離れるとか、この街を出ようとかは五月蠅い。

普通の場合は母親が五月蠅いものだが、この場合は父親の方が五月蠅かった。

綵菟の父・棚月^{せつき}は、この街の人間ではない。

だから知らないのだ。この街で産まれた人間は、大学に上がるまでは絶対にこの街に籍を置く。

その理由を。

この街は東京の外れで、本来ならベッドタウンになっていてもおかしくない場所だ。周りは皆そうになっている。

だが、この街だけは、そうっていない。

雪廻町。

それが、この街の名前。雪が廻るとはどういう意味なのかは、郷土史を紐解いても載っていない。

それなりに栄え、活気のある街だし、最新設備もばっちりなのに。

東京の孤島。

そう呼ばれるほど、この街は不思議に満ちた街だ。しきたりというには徹底し過ぎている風習によって支配され、決して背かない。

背けば報復が待っている。

当然のことながら、棚月はそれを信じていない。

それは、この言葉を只の風習だと思っているから。どんな恐怖か、判らないから。自分には関係のないことだから。

そして運良く、まだ視ていないから。

獣の艶然で凄絶なその姿を。

綵菟は頁を繰る手を止めて、窓の外を見る。

今夜は、多分誰も死なない。

静かな闇の広がる街は、ざらついた空気も、誰かの意志も気配さえも感じさせない。

この街で代々生まれ育ってきた家のものだけが持つ、特殊な第六感。

夢で未来を知ったり、空気や風の流れ、星の位置、そういったものから感じとる能力が特に優れているというくらいのものだが。

綵菟や睦瑳は、特に長けていた。

そして、死んだ柚弥は。

柚弥も同じようにして育ってきたし、綵菟や睦瑳に比べれば精彩を欠いたが、それは単に二人の能力が異常なまでに高すぎるだけで上の中、という具合だった。

その柚弥が死ぬなんてことは、普通ならありえない。

それも、交通事故で。

雨で凄く滑り易くなっている路面を大型トラックが走行中に横転し、横断歩道の前で信号待ちしていた柚弥を下敷きにした。

柚弥は即死し、トラック運転手は現行犯逮捕された。

運転手は雪廻町の住民ではなく、東北から東京に移動中の男だった。

もちろん、柚弥なら事前に察知してその道を通らないはずである。綵菟にも柚弥に死相は感じられなかった。

それなのに、柚弥は死んだ。

人伝に聞いた話によると、逮捕されて事情聴取された運転手は、何かに手を引つ張られたと思ったら、手が勝手に動いて、気が付いたら倒れていたのだと主張しているらしい。

そんな如何にも言い訳がましい釈明を警察は信じるわけもなく。だが、地元の住民は皆信じた。

否、地元の警察官は当然のように気付いただろう。だが警察はなにより体裁を重んじる腐りきった公的組織だ。その中では、そんな発言は迂濶にできないのだろうと、綵菟は思う。

住民は同時に、また《・・》なのだと、嘆き悲しんだという。

これは、報復なのだ。裏切り者に対する。

柚弥に罪はない。

報復は、無関係な人間に行く。

けれど決して、遠くもなく。

報復が起こる以上、この街には裏切り者がいる。

その人間が裏切り行為を止めない限り、その惨殺は続く。けれど決して、睦瑳ではない。

だが本当に、“報復”なのだろうか。

睦瑳は、逆に言えば狙われているのではないだろうか。

報復に見せかけた、殺戮と惨殺と暇潰しの隠れ蓑として。

綵菟はその獣の姿を脳裏に浮かべ、ため息をついた。

遙か太古の昔より、この街に巢食う、謎の存在。

ただ獣としてのみ知られ、恐れられてきたその存在の真意を知っているのは、この香月家と、睦瑳の家系の人間だけだ。

香月は羽月の姓で、旧姓を珂櫛^{かつき}という。

それは、この街の巫覡^{ふげき}と、守護の家系だった

。

一日の幕開け（前書き）

大変遅くなりました。

亀で申し訳ありません。

ヘタレですので気長〜に待っていてくださると有り難い限りです。

一日の幕開け

柚弥の葬儀の翌日。

今日も平日で、こんな事件の最中でも、学校は閉校にはならない。もちろん綵菟もそれを承知している。

「綵菟、さっさと起きて朝食片しちやいなさい」

綵菟の母・茉鷗^{まや}が大義そうに起こす。
もちろん階下からだ。

綵菟は読んでいた本にしおりを挟み、制服の青いシャツに濃紺と緑青のネクタイ、黒地に青のラインの入ったスラックスという格好に、ブレザーの上を肩に引っかけて部屋をでる。

階段を降りていくにつれ、コーヒーの香ばしい香りが嗅覚を刺激して、食欲をそそろつと躍起になっているのがわかった。

思わず、顔を歪めてしまう。胸が痛い。

綵菟はダイニングに行くと、丁度皿を並べていた茉鷗に挨拶する。

「はい、おはよう。今日は何時になるの？」

「さあ。多分今日は死人はでないよ。だから取り敢えずいつも通りになると思う」

「そう…。今日は珂観のお祖母様が呼んでいるの。お屋敷まで行ってもらえるかしら」

その言葉に、綵菟は運んでいたサラダのボールを落としそうになる。

珂観のお祖母様というのはもちろん、茉鷗の母で綵菟の祖母である。

しかし、珂観の家系ではなく、しかも能力は低く無いに等しい。そのくせ自分の力はあるのだと、事ある毎に見せつけようとしてきたり、能力の高い綵菟を呼びつけては、夫に教えてもらえない珂観家の秘密まで暴こうとする厄介者の人間だ。

茉鷗もそんな実母には呆れていて、邪険にしているというのが現

状なのだが、やはり断りきれないこともあるのだ。

「それとお祖父様も。悪いけど、先にお祖母様の用事を済ませてから行ってね」

「お祖父様が？珍しいな」

綵菟の祖父・鳳征たかゆきは、現・珂櫨の当主で、綵菟や睦瑳の次くらいに能力ちからが強い。

もちろん覲（男の巫女のこと。神主ではない）としても優秀で、人格者でもある。

綵菟から見れば、どうしてそんな祖父があんな祖母と結婚し、あまつさえ今でも離婚していないのか甚だ疑問なのだが。

菟にも角にも、茉鷗は鳳征のことは大好きで、こちらには刺がない。本人は無自覚なのだろうが、大変分かりやすい反応だった。

綵菟は頷くと、自分の席について箸を取る。

「いただきます」 食べるということは、生きるということ。

それが、鳳征の教えだった。

どんなに体が欲していなくとも、自分に僅かでも生きたいという欲望があるのなら。

概して、親というものは、息子に先立たれるのは厭なものだ。

茉鷗や棚月も当然、その範疇から漏れてはいない。

食欲がなくとも食べさせようとするとするし、健康管理にしても、過保護ごほなくらいに気を付ける。

その気持ちは綵菟にとっても嬉しいから、綵菟も食べるのだが。

もう何を食べても、味がしない。

暖かいものは、暖かいだけ。

冷たいものは、冷たいだけ。

そんな感じだ。

「ごちそうさま」

味気ない食事を終え、綵菟は家を出る。 茉鷗は終始甲斐甲斐し

く世話を焼き、出るときには弁当を押し付けて、

「今日は大丈夫！！」

その言葉に綵菟は笑って応えると、
「お祖母様以外はね」
そう言っ て家を出た。

綵菟の通う高校は、私立琳鋭高校という。

雪廻町は孤立しているが普通の市よりも大きい。

その癖、都の方は雪廻町には全くと言って良い程無関心で、支援金はおろか補助金も雀の涙という具合だ。

公立校はない。

雪廻町には小学校が18校、中学校が12校、高校が10校、大学が3校ある。

当然全て私立で、運営は一括されている。

小学校は、他所から来た人の子供、つまりは能力を持たない子の為のところは7校、それ以外は学区別で、クラスは能力別に分かれている。

中学校に上がると能力別に学校が分かれて、高校はそれに学力も加わって分かれる。高校は共学8校、男子校1校、女子校2校だ。

大学は他所からも受け入れているから、学科を選ばないと地元は一人だけとかになって、能力を怪しまれないようにするのが大変だったりする。

能力はそこまで大したことではないけれども、他人の目からみれば、それはとても魅力的なものに映る。

特に、強い者ほど。

今はまだ、狭い檻のなかのような生活でマシなのだろう、と綵菟は歩きながら思う。

因みに琳鋭高校は男子校で、全国でもトップクラスの高校として

名高い名門校だ。

よく少女が夢見るような男子校の風習はなく、かといってむさ苦しくもない。

いや、最近は空気が重いが。

覇気がなく、固まって行動する。

授業中に突然泣き出すほど情緒不安定な生徒もいれば、睦瑳の顔を見るなり“頼むから殺さないでくれ”と懇願する生徒もいる。

私立である上に、閉鎖された街。

睦瑳に対する風当たりは、少々強くなりつつあるようだ。

「ふう……」

綵菟がふと睦瑳のことを考えて、息を吐くと、もう学校だった。飾り気のない校舎に、覇気のない生徒が吸い込まれていく様は、さながら囚人のようにも見えた。

この町は、孤立している。

それを実感させられる。

琳鋭高校は、雪廻町の学校の中で唯一一般的に知られていると言っている。

全国からの志願者があとを絶たず、今や生徒の半数は全く関係のない地域から来た人間ばかりだ。

彼らのみが明るく振る舞い、町の人間は、終始頭を抱えてばかりいる。

彼らが明るいのとは、何も知らないからだ。

人が何人死のうが見向きもされない。

彼らにとって大切なのは、人の生き死によりも自分の成績であったり、難解な数式でしかないからだ。

かろうじて地方紙のお悔やみ欄には載るが、これだけ何人も亡くなっているというのに、特に事件として取りざたされたことはないのも、それに拍車をかけている。

他の学校ならいざ知らず、琳鋭では、生徒でも教師でも、死を明らかにすることはない。

呪いや祟りなどといった風潮が外部に流れれば、この町は一気に全国的に有名になるのは明白だからだ。

生徒の場合は転校、教師は病気で入院後に退職、といった具合に隠蔽される。たとえこの町の人間でも、知らないことすらある。

結局のところ、生死を正確に知っているのは役所と町長、珂欄家、そして、睦瑳の家である瑞木家だけだ。

瑞木家は珂欄と並び、長くこの町を守ってきた。

双壁とも謳われた両家は、今でも信頼が厚い。

だからこそ、睦瑳はまだ、排除されなくて済んでいる。
普通の家の子供だったのなら、とうに追い出されて、蔑まれて
。

「よおつ、あやゝ。元気ねーの？」
びくつと。

綵菟は顔を上げる。目の前には見慣れたクラスメイト、三善連の姿があつた。

考え込んでいる内にも無意識に足を運び、気が付けば教室まで来ていたらしい。

外部から来ている三善は、例に漏れず明るい。例えこの町の生徒が暗い顔をしていても、特に気にした様子は見せない。

陰気な奴等、としか思つてないようだった。

「……おはよ、三善。昨日本読みすぎて寝不足なんだから、朝っぱらからでかい声でいきなり話しかけんな」

無理矢理作つた愛想笑いで言い訳すると、覇気のない教室に、綵菟も入っていった。

一日の幕開け（後書き）

なんだか地の文が後半あたり炸裂してましたね。
ですがまだまだ序の口かも知れません。
なにしろくらくいですからね、一部を除いて。
個人的には大好きなのですが…。

亀のような私の執筆速度に呆れずにこれからも読んでください。
（切実な願い）

さて、この街の…（前書き）

タイトル意味不明ですね。良いのが思い浮かびませんでした。

無駄に長い話ですが、これでも切りました。（え

しかしそれでも警告部分の描写が先送りされまくっていていまいちホラーにならないのは、私に筆力がないせいですね。

精進します。

さて、この街の…

「でよ、あん時のあの顔！！ねえよな」

「…そうだね」

「相変わらず辛気くせえ。あーあ、入学したときには普通の奴等だと思っただけだなあ…」

「辛気臭いつて…まあ、幼馴染みとか親戚とかが死んでるわけだし、仕方ないだろ」

「けどさあ、自分も今にも死にそうな顔しちゃってよ、悲しいのは分かるけどさ、悲観しすぎっつーか」

「自分も死ぬかも知れないからだろ、と心の中で突っ込みながら、綵菟も同感だった。」

この学校にいるのは皆優秀な者ばかり、誰かが死にそうか、そうでないか、冷静になればある程度は分かる。

もちろん万能ではないし、先の柚弥のように、不測の事態も起こりうる。

報復はいつ、誰にくるのか、それは気まぐれだ。

あの獣が誰を選ぶのか、どうやってこの街の住民に報いるのか、それは、死にゆく本人にしか、分からないのかも知れない。そしてそれが本当に獣であつたかどうかも。

ただ一つ確かなのは、睦瑳が獣の獲物ではないということだけ。獣は睦瑳のことを気に入っているらしい。

だから絶望の闇に引きずりこもうとする。獣は仲間が欲しいらしい。

『報復』は、睦瑳の周りを取り囲む人間に嫉妬しているから、起こる。

そう噂されている。

些末なことを裏切りと称し、罪を着せ。

罪がないとは言わない。

けれども理不尽な感がある。

綵菟も知っていた。けれども離れることはできない。

離れたらきつと、ぎりぎりのところで保ってきたこの危うい均衡は、堰を切ったように崩れ落ちる。雪廻町は崩壊するだろう。そしてその寸前、蠟燭の最後の灯火、あるいは断末魔の叫びの如く、この街は否応なく外部の目に曝される。

そうなれば、この街は余計に獣が動きやすくなる。

人々は畏れ、嫌い、人間社会から追放する。

そして睦瑳は誰の目からも見られず、顧みられることもなく、避けられる。

獣はその時を待っているのだと、そういう噂が。

人間社会から隔絶された街の、その社会からも見捨てられてしまえば、必ず絶望するものと、信じて疑わない。

けれど、仲間にするには睦瑳は純朴すぎ、そして愛されすぎた。

彼は信じられないくらいに無垢だった。

それは一重に綵菟と柚弥が彼とともに、全く同じように生きてこられたからだ。そんなものは奇跡に等しい。

獣に気に入られた人間は、街を守り続けてきた一族の人間で、双壁と謳われるもう一つの一族には同性の同い年の子供がいて。能力がずば抜けていたのは、また同い年で。憎み合うこともなく。

睦瑳は六歳のころに獣に出会い、そして気に入られた。

それは事実だ。噂通りの。

親友が目の前で獣に気に入られ、そして獣が　　艶然と愉う様を、当時の綵菟と柚弥は、ただ呆然と見ているしかなかった。

その時のことを、睦瑳は覚えていないけれども。

綵菟が鳳征に頼み込み、催眠術に長けた人物を洗いざらいにして探しだし、睦瑳の記憶を封印したのだ。

もちろん今でも睦瑳は自分がどうして黙に氣に入られたのか知らない。

「…あや？」

三善の言葉に、はつとなる。

綵菟は普段、そうぼうつとしたり、物思いに耽ったりはしないタイプだ。実際には違っても、三善などの他人にその姿を見せることはなかった。

それだけに、ショックをうけた。

「何だ、三善？　　っつーかその“あや”ってやめてくんねーの？」

焦りを滲ませずに、他愛のない会話にすり替える。

何だかんだでいつの間にか愛称で呼ばれるようになってから既に十年近く。

逆に親しい人間ほど、“綵菟”と呼ぶ。

「だって、かわいーじゃん。なんか女の子みたいだし」

「ここに女がいないからって、思考が腐ってないか？」

「腐ってるって…あやって美人だししゃーないじゃん」

「　　美人、ね」

三善は自分より若干低い位置にある綵菟の顔を覗き込むようにして言う。

綵菟はこれといってルックスがどうのということには拘らない。

髪も解かしたままで整髪料などは使用してないし、染めてもない。これには地毛が赤みがあった金茶だからというのもあるが。

この街の人間は概して四種類に分けられる。赤いか青いかと、黒いか白いかに。

茉鵲は赤と白、体毛と瞳が赤みがあった色で、肌は白い。

睦瑳と柚弥は青と白、鳳征は青と黒。

そして綵菟は。

体毛は赤、瞳は青、肌は白、だが髪も瞳も光の差し具合でどんな

色にも変化する。

それが綵菟の“綵”と言う字の由来だ。

加えて小作りな顔に大きな瞳、ただし少々つり気味、小さな鼻に薄く整った桃唇、睫毛は一センチ以上は確実だ。つまりはこれ以上なく整っている。それも、ニキビもほくろも見当たらず、肌理も細かいという、世の女性が羨む肌も持っている。

さらには平均身長はあるものの、肉付きの悪い身体のせいで見た目が実際より小さく見える。

そのおかげで嘗められた綵菟は、別に悔しくもないのに『悔しかったら勝ってみろ』と喧嘩を売られ、腕相撲百五十人抜きして畏れられ、今では『裏番長』とも呼ばれている。

さらにこの街の人間は綵菟のことは知っているから、女性に間違えられることはないが、毎年進学の時期になると、必ずナンパに遭うのは一種の名物だった。

とはいえ、世の中変わってきて、綵菟が男だと知ってもバイだからと食い下がる者や、それを機にホモに目覚める者など、実に様々な者がいて、手強くなっている。

おまけに。

綵菟は知らないことだが、他校の女子生徒たちが学校を問わず、果ては大学生たちも参加している同人グループによって、綵菟と柚弥と睦瑳と三善で、睦瑳が綵菟を好きで、柚弥が睦瑳を好きで、三善が綵菟を好きという（当て馬役）同人誌を発行、売り上げ（通販）一位という事態になっている。

もちろんそんな事実金は輪際ないが。

「ところでさー、お前と仲良かった…相良…だっけ？昨日、さ…その、葬式」

「見たのか」

「でも、どうして転校なんていう嘘つか……っ」

「お前たちがいるからだよ」

綵菟はすげなく言い捨てると、自分の席に着く。
できれば生傷に塩を塗り込むような真似はしないで欲しかった。
それはもちろん、綵菟のエゴだったけれども。

窓際の前から四番目、後ろから三番目にある綵菟の席からは、山が見える。

十一月も末、定期テストが何故か中間と学期始めしかない雪廻町の高校生たちは、朝から予習復習に励むものもいなければ、取り立てて片付けなければならぬ宿題もなかった。

この街の人間だという割には態度がほとんど変わらない綵菟に何を感じたのか、最近では外部生がやたらつるんでくるし、内部生も家柄のせいか相談が絶えず、いつも綵菟の周りには人がいた。

だが、三善とのやり取りを遠巻きに見ていた彼らは、綵菟が不機嫌そうなのを見て、近づくのをやめる。

綵菟が取っ付きにくい性格をしているわけではない。

むしろ、慕われ易い性格をしていた。

たとえ不機嫌でも、綵菟は八つ当たりをするタイプではなかった。かといって笑顔を振り撒いたりするタイプでもなかったが。

それでも近づいてこないのは。

（柚弥が死んだのせいだろうな）

綵菟は、確かに柚弥が死んで悲しい。

一番親しかったのだし、唯一の獣の本質を見た仲間だった。

だからといって、ヒステリックになったりはしない。

綵菟は公平でありたいと思っている。

いくら仲のよい友人が亡くなっても、苦手だった人間が亡くなっても。

（死は、公平だ）

その原因がどんなに理不尽でも、死には変わらない。そして死者には敬意を示す。

いくら俗世で何を言ったところで、それは単なる負け犬の遠吠えのようなものだ。

そして何より、綵菟が死を怖がらないから。

（他人事の死なんて、ないのにな）

今日も生きている、昨日も生きてきた、だから明日も大丈夫。他の誰かが死んでも、私だけは皆心の中でそう思っているに違いないと思う。自分が分かっているようで分かっていなかったように。

そうでなければ、無闇に他人の死を話題にはしない筈だ。

この街の人間にしても、明日には自分かもしれないと恐れつつ、自分の行動を振り返り返りもせず、あり得ないと否定する。一方では睦瑳を恨む癖に、表だって行動には移せない。

それが返って危険だということに、気付く様子もない。だからといって綵菟が教えてあげたところで、その態度が治るものとも思えない。そしてそうする内に横線は増え、寺と葬儀屋と獣だけが喜ぶという案配。

まったくのジレンマだった。

「……と……やと……綵菟」

近いような遠いような距離で低い美声がする。

でも、どこか寂しげな響きで、玉に瑕だ、と思う。そしてそれは少しだけ焦っている風だった。

それが睦瑳の声だということに気付いて、ようやく自分が自分の

世界に入り込んでいたことに気付く。

「…綵菟、大丈夫？ぼーっとしちゃって」

「ああ、多分寝不足。昨日日本読み耽ってたから、朝の五時。平日なのに油断したかな」

とぼけて、肩を竦めながら言うと、睦瑳は笑った。

「どうしたんだ？朝から俺の教室に来るなんて」

「うん、なんとなく。手持ち無沙汰だったし、俺のクラス、街の奴等ばっかで暗いし、何か出てけって言われてるみたいでさ…」

睦瑳の言に、綵菟は深い溜め息を吐く。

綵菟のクラスである一年E組は、街の人間が綵菟を含め14人、外部の人間が29人の43人クラス。元は45人だったが、二人は死んだ。

一方の睦瑳のクラス、一年D組は街の人間が32人、外部の人間は僅かに6人、死者は七人。

明らかに多い上に、睦瑳が瑞木家の人間だということと、獣に目を付けられているということが相まって、睦瑳を腫れ物のように扱う。

その一方で目線や噂話ではいくらでも本音を駄々もれにさせる。クラスに居ずらいのも無理はないと思う。むしろ睦瑳が怒らずに返って責任を感じているのが見ていて痛い。

それと同時に、何となく温かく、そしてひどく眩しいものを感じていた。

どうして人の嫌な部分ばかりを見せつけられるこの環境で、こんなにも無垢で素直にいられようか、と。

それがとても得難いものであることは分かっていたし、守ってき
て良かったとも思う。

「綵菟、何笑ってるの？俺、変なこと言った？」

綵菟はそのまま静かに首を振る。

そしてふと思いついたように言う。

「明日、一緒に柚弥の事故現場に行こうぜ。もしかしたら、何か原因が分かるかも知れない」

「原因？それなら……」

「またお前は……。お前のせいじゃないって言ってるだろ」

綵菟は呆れたように睦瑳を見やる。

睦瑳はややたじろいだ風だが、すぐに反駁する。

「でも、実際俺が獣に気に入られたらしいからで

こつんつ

睦瑳が妙に可愛らしい音とそれに比例した微かな痛みに顔を上げると、綵菟が右手の拳の側面で軽く頭を叩いたのだと気付く。

思わずきょんとしてしまったが、すぐに綵菟は

ばしんつ

「~~~~~」

声にならなかった。綵菟が定規をしならせて思いつきり弾いた。

それもデコでなくアゴに。ちなみに顎は急所である。

綵菟は少しだけしてやったりという顔をしていたが、雰囲気そのものは至って真剣だった。

そんなことより睦瑳を含むその場の全員にとって意外だったのは、子供のころから餓鬼大将というわけでもなく、落ち着いていて真面目性格をしていた綵菟が、突然こんな行動をとったことだ。

「綵菟……」

「獣に気に入られた、ね。あの子、そんな噂本気にしてたらどんどん突け上がらせるだけなんだよ。お前は何か裏切り行為をしたのか？してないだろ。なら堂々としてろ。あいつらは自分の行動に裏切り行為を大なれ小なれ含んでいるせいで、いつ『報復』に遭うのか分からないのが怖いから、裏切り行為を働いてないお前を妬んでるだけなんだから、気に病むだけ阿呆なの。分かったか？」

綵菟は一息に捲し立てる。自分でもかなり無駄に饒舌だな、と思いつつ。

「綵菟……」

「分かったのか？」

「でも、どうして裏切り行為してないって他人に分かるの？」

綵菟は返事に窮した。

他人が裏切り行為をしているかどうかは、一見で分かるわけではない。

綵菟や睦瑳でも、目撃していないことには分からない。
本人が裏切りだと自覚していない限りは。

そして、どうして黙に気に入られていることを、街の人間が知っているのかというと。

綵菟は頭痛と目眩と、僅かな恨みを覚える。怒りはとうの昔に消え失せた。

珂觀詩織。

他ならぬ、綵菟の祖母のせいである。

「……ある一人の迷惑女がね、隠すものじゃないとかわめきたてて、噂をこれ見よがしに広めたんだよ」

「女？その人、なんで？俺に恨みでもあった？」

「いや。あの女は後先考えずに自分の勘は絶対だとか嘯いて言いふらしたりする癖があるわ、責任は取らんわ、言い逃れはよく聞く

と支離滅裂な上に頓珍漢なのにその場だけではそれらしく聞こえるしでとんでもない。お前よりあの女のほうが五百倍は迷惑」

怒りは忘れても、決してその行動を許した訳ではない。

綵菟がこんな風に語っている時点で、ある意味認めているということになるわけだが、それとは事情が違った。

綵菟は祖母の言を無視し、一度もその通りに動いてやったことなどないし、血が繋がっているなどとは信じたくもなかった。

「五百倍？」

そんなに？ときよんとする睦瑳に、綵菟は言い募る。

「俺にとつては。俺は聞き流しとけばどうにかなるけど、お前の場合実害を被っているわけだから、俺の七百倍は酷いだろ」

「それは言いすぎじゃ……」

「全く」

綵菟は睦瑳の言葉を遮る。

「あの女のろくでもない噂のせいでお前の人生滅茶苦茶にされてるんだぞ？少しは分かれ」

睦瑳は成る程、とばかりに頷いたが、果たしてどこまで正確に理解しているのか。

そして諸悪の根元に会うことを考え、綵菟は朝から珍しくも真つ赤なルーズリーフに睦瑳と共に祖母への口上を並べ立て始めたのだが、嬉々として一緒に考える睦瑳に、『あの女』というのが詩織だということに気付いていないことを悟り、がつくりしたのだった。

さて、この街の…（後書き）

この前からお祖母様に対して言いたい放題です。

うん、睦瑳は大型犬のイメージですね。

きっと獣もそう成長しそうな気配を感じたんでしょう。

見えない惨殺者、真昼の出来事へー（前書き）

流し読みをする方はやめておいた方がいいかも知れません。
会話部分より圧倒的に地の文が多すぎて困ったことになっている
ので。

見えない惨殺者、真昼の出来事へ」

異変は何もない。元々何も感じなかったのだから、それでいい。でも、息を吐いて良いものなのだろうか。分からない。

ぼんやりと四限までの授業を終え、昼食も摂らずに綵菟は悩む。やはり、柚弥という前例で、すこし神経質になっているらしい。柚弥の事故から四日。

ありえない事態に困惑し、親友を失った痛みはまだ強い。だが確実に、冷静にはなってきた。柚弥の死はこれからも一生綵菟の中に巣食い続けるのだろうが、現実を見つめなければならぬことくらいは承知している。

そうして無理矢理現実と向き合つと、おかしいとさえ思う。柚弥は裏切り行為について熟知していた。そして自分からそれをやるほど愚かではなかった。

裏切りとは当然、第一にはこの街を出ること。物理的にでることには何の問題もない。

籍さえ雪廻町にあれば、どこに逃げようが自由だ。それは罪でも何でもなく、獣もそこまでは頓着しない。

だが、そうやって総ての人間が逃げてしまうことはない。この街に人間を留めているのは自分たちの能力であり、逃れることはできない。

『街を出る』。それは『街を売る』ということと同義として使われる言葉。

すなわち、自分たちの能力を外部の人間にリークする、あるいは

ギャンブルに使用する、さらには外部の人間に調査をさせる。
それは至極まっとうな理由だ。

なのに。

それは絶えることはない。

それは一重に街を出る意味を知らないからだ。

そして、そのことについて教えることは許されてはいない。

許されるのは教えを乞うた者のみ。

だがそれすらも知らない。

そしてそのことについてすら、教えることは許されないのだ。

それが第二と第三の裏切りである。

柚弥は教えを乞うた。

他ならぬ綵菟と睦瑳と共に、鳳征に。

知らない筈も、忘れる筈もない。

裏切りをすれば自覚があつたはずであり、単なる不慮の事故であれば、柚弥が回避できない理由もなく、自殺であるなら柚弥の当日の言動、運転手の証言の両方で否定できる。

そして何より。

獣は睦瑳を殺さない。そして綵菟と柚弥も殺さないのだ。

それは綵菟たちが六歳の頃まで遡る。

つまり、睦瑳が獣に気に入られた日。

獣は嫣然と微笑んだ気配を見せた後、綵菟と柚弥に向かって、金

属質の声で言った。

曰く、

『吾が氣に入りし者の友人は、吾が氣に入りし者が選んだ者ゆえに、同様に裏切ることはないと信じよう。吾が氣に入りし者が漆黒の闇に染まりきるその日まで、共に歩め』
と。

だから余計に柚弥の死は不可解なのだ。獸が殺した訳ではない。報復ではないのだ。

獸は概して、この街が好きなのだと、綵菟は感じていた。

この街を崩壊させてしまいたいのは、睦瑳が手に入らなかったら、ということなはずだ。

それは獸が非常に人間染みた思考を持っていることを意味する。

闇は絶望、絶望の中に、果たして好きだという感情を抱くことは可能なのだろうか。

浮かんできた疑問に、綵菟は即座にノーと答える。

（一つの色に染まってしまえば、何も要らない。そこにあるのは仏のように澄みきり、そして酷く単純な想いだけ。それだけしか抱かないのでは） だが綵菟は気付く。

報復は本人に行く訳ではない。

必ず、周囲の人間にいくのだ。

見せしめの如く。

だからといって、柚弥が安全であったことに変わりはないのだが、嫌な予感がする。

漠然と、獸ではない気がするのだ。

獸の筈がない。

それは有り得ない。

今更になつて反故にする理由もないのだから。

だとしたら。

嫌な汗を感じる。

獣のライバルのような者が、現れたのではないだろうか。

そして裏切り者であるのに拘わらず、純粹に殺人を楽しむ部類の者だとしたら。

考えて、静かに頭を振る。

周囲が綵菟に好奇の視線を向けていようが、どうでも良かった。

考えすぎだ。柚弥が死んだのは事実でも、獣ほどの力の有る者を、果たしてこの街の人間総てが見逃すことができよう筈もない。

そして次に思い浮かぶのは。

（人間：だろうな）

人ほど恐ろしいものはないように思う。

睦瑳は表立って迫害されているわけではない。

だが確実に、獣に気に入られたというだけで生き延びているのだと、恨む者もいる。

睦瑳に対する報復のつもりで、柚弥を殺したとなれば、有り得ない話ではないのだ。

「 綵菟。本当に大丈夫? 」

ふと気付くと、また睦瑳の顔がある。また捨てられた犬のような顔をしていたから思考も霧散し、思わず苦笑を洩らす。

「 待ってたのか? 」

「 悪い? 綵菟が朝からおかしいから、せっかく心配したのに 」

「 悪かないけどさ。でもただぼーっとしてただけでおかしいなんて言われんのは、健康な証拠だよな 」

つとめて綵菟は茶化す。今考えたことは、推測の域を出ない。

そして、これからもそうであることを望みたかったから。

「 ウチの学校は昼休みが二時間あるんだから、別に五分くらいいいけどさ、綵菟の顔にその口調って、なんか変 」

「 俺から言わせれば、お前もな。その顔見ると大型犬連想させられる。小動物系の大動物というかなんというか 」

「 心配して悪くないって言ったの綵菟じゃん 」

「 けど、そう見えるんだから仕方ないだろ 」

笑いながら綵菟は鞆から弁当箱を出し、席を立つ。

そのまま教室を出ると、睦瑳も後ろから着いてくる。

着いた先は化学準備室。定番の喫茶店である。

因みにここには劇薬も置いてあるため、鍵が掛かっている。

それもカードキータイプで、持っているのは理科系の教師のみ。

立ち入りを許可された生徒のみ解除ナンバーを教えられ、しかも毎日ナンバーが自動更新されるから、全てのナンバーの控えがある。そしてそれはmicr oSDカードごと渡される。

もっとも綵菟も睦瑳もナンバーを全て覚えているので、そんなも

のを見る必要もなく、解除して入ったが。

内に入ると、既に他の面子はそろっていて、弁当を食べている。コーヒーの香りが充満していて、思わず朝かよ、と綵菟は思った。何を食べても味はしないが、嗅覚までどうかしたわけではない。

というより、脳まで信号が行っているにも拘わらず、それを感知してくれないという感じなのだ。

「おー、香月、瑞木。双ヅキが来たか」

そう言ったのは伊志嶺義一という、三十代の生物教師だった。

伊志嶺は双璧と呼ばずに双ヅキと呼ぶ。そのほうが愛着が湧いていいと言っている。

「「こんにちは、伊志嶺先生」」

二人そろって挨拶をする。

「迫田先生はどこに？」

迫田は五十代の化学教師で、伊志嶺同様、気さくな人物だった。いつも化学準備室に居座っているのはこの二人で、理科研究室に戻ることは、テストのときだけだ。

綵菟は以前、理由を尋ねたが、二人は揃って『授業に遠いから』と答えた。それに加えて、綵菟たちのように学生時代に入り浸っていたらしく、すっかり故郷扱いなのだ。

「^{さいた}迫田先生なら地学研究室。また石集めてるからなー、楽しみにしとけよ」

迫田は化学教師だが、地学に関しても免許を持っている。個人的にも石の収集家で、学校が長期休みに入ると世界中飛び回るほどの熱心さだ。

綵菟などはかなり好きだが、石といっても宝石や隕石にしか興味のない生徒が大半で、煙たがれるのが常だ。

ここにいる生徒はそんなことはなく、皆石に興味を持っていたが。「待ってます」

綵菟が伊志嶺にそう返して、準備室にしてはかなり広く、普通に個人の実験室としての設備も整った部屋の、窓際の自分の定位置に行くと、即座に話しかけられる。

「香月、コーヒー淹れてくれ」。今日は宮崎のヤツが淹れたんだけど、クソまじい」

「うわあ、酷いなあ丸塚先輩。ちゃんとレシピ通りに淹れましたよ」

「お前今日なに淹れたんだ？」

コーヒーなんて、余程のことがない限り、そうそう不味くは淹れられないと、綵菟は思うのだが。

「あやのレシピ。アメリカンブレンド」

「嘘だろー。なんだこの不味さ」

「睦瑳、どんな感じだ？」

綵菟は睦瑳に任せる。コーヒーを淹れるのは綵菟の方が上手いが、味に敵しいのは睦瑳の方だ。

綵菟に促された睦瑳は、一口吞んですぐに感想を言う。

「苦味が強くて美味しくないね。それにモカ入れすぎ。酸味が強すぎて食欲も減退しやすい。まあそこは個人の嗜好の問題だけど、ケーキ食べてるわけでも菓子パン食べてるわけでもないときにはキツいね」

「相変わらず敵しいねえ、瑞木。こだわり？」

三年の田村がにやにやしながら訊く。

妙に楽しそうなのは、普段は拍子抜けするくらい天然な睦瑳が、こういった話題になると誰よりも敵しいというギャップが面白いからだ。

「あー、なるほど。でもそれだけでそこまで不味くはならないよな。

……もしかして、伊志嶺先生、焙煎間違えました？」

「え？いつも通りだけど」

その言葉にぴくりと反応したのは、やはり睦瑳だった。

「先生、俺言いませんでしたっけ。メキシコとホンジュラスは豆の

ランクを上げたから、焙煎は二割増しにしないでいいって」

一介の私立高校で、しかも準備室。はっきり言って睦瑳と綵菟と柚弥が入学し、この部屋に入り浸るまで、コーヒーなど飲めれば文句なしとでも言うように、安い豆しか置いてなかったし、種類もコロンビアとブラジルしかなかったので、美味しくなかった。辛うじて焙煎は伊志嶺ができたのでまだ良かったのだ。

今ではすっかり味に慣れてしまっているが、それも綵菟が自作のレシピを昼休みにレクチャーして、教え込んだためだ。

「え、あゝそういえば言ってたっけ。ごめん。忘れてた」

悪びれる様子もなくあっけらかんと笑う伊志嶺に、キレたのは宮崎だった。

「なんでそんな大事なことを忘れんですかっ！！お陰で先輩たちにいびり倒されたじゃないですかっ」

「……それはお前がいじられキャラだから……」

悪魔の四人組と呼ばれる田村、丸塚、三年の矢崎、二年の刑部が、見事なカルテットで答えた。

もちろん、宮崎はそんな四人の思惑通り、泣き崩れた。

綵菟はそんな、日常の一コマに笑みを浮かべながら、コーヒーを淹れる。

特に、宮崎にはカフェラテを、伊志嶺には特別にかなり深めの焙煎をしてあったブラジルをブレンドせずに出す。

他はハードブレンドだ。

ここに居るメンバーは伊志嶺、迫田を含む15人。

柚弥が亡くなる四日前までは、16人だった。

一年は綵菟と睦瑳と宮崎の三人、二年は丸塚と刑部と芳崎と春日と龍崎と桐生と新川の八人、三年は田村と矢崎の二人だ。

綵菟と睦瑳が双ツキと呼ばれるように、何故だかやたらと崎が多いので、宮崎、芳崎、龍崎、矢崎は4崎と呼ばれている。

このグループは、まず誰もが入りたがる。

第一条件は雪廻町の人間であること、第二条件は能力が高いこと、

第三条件は成績平均が9・0以上であること、そしてもちろん実験好きであることだ。

そしてこのグループに入る条件は、グループのメンバー以外は知らないのだ。

言わば琳鋭高校のカリスマだが、実態はこんなものだし、特に活動しているわけではなく、化学準備室に入り浸って実験をするオタク集団に近い。

そして開校以来続く伝統でもあった。

因みに、グループ名は『ブラックサレナ』という。
どうして黒百合なのかは綵菟も知らない。

綵菟はコーヒーを淹れ終わると、ようやく席について食事を始める。

弁当箱を開けると、即座にサラダとキンピラごぼうだけを避ける。すると案の定、複数の手が伸びてくる。

「卵焼きもらうよ」

「オレ唐揚げな」

「生ハムもらうから」

「飯寄せ」

「オレンジとパイナップル頂きます」

「焼売と春巻き片すぞ」

「恵んでくれてどうもありがとう」

口々に田村、刑部、矢崎、丸塚、芳崎、龍崎に言われるが、もう口の中にすらない。恐るべき早業で綵菟の弁当箱は空になった。

蓋のほうに移しておいたサラダとキンピラごぼうを食べ終えれば、綵菟の昼食はそれで終わりだった。

綵菟はサラダが食べられれば満足だったが、それでも理不尽な想いは消せない。

「人の食べ物を襲わないで下さい。ハイエナですか？」

「ハイエナ上等」

先ほどのカルテットが六重奏になり、いつそ悲しいまでの響きを湛えている。

だが、大抵の人間がびくびくと怯え、挙動不審な行動を取る者も居るなか、これだけ明るいのには正直救われた。

綵菟が丁寧にコーヒを淹れていたお陰で、長い昼休みも残りは一時間強。とつくに昼食を終えた生徒のうち、外部生の一部はグラウンドで遊んでいる。

今日は一昨日までの雨とは一転、快晴で、雲の一つもない。それだけに、高くなっていく空が如実で、冬へと近づいていることを教えていた。

綵菟はぼんやりグラウンドを見下ろす。

日常的な光景だからこそ、今のこの街では浮いている感がある。

綵菟はそう感じた。

自分たちの実験行為にさえ。

「矢崎先輩、田村先輩、受験勉強はいいんですか？」

「推薦だし問題ないでしょ」

ふとした宮崎の疑問を、即座に遮る。共に文系、理系の学年トップを独走する二人にとっては、大した問題ではないらしく、薬品をピーカーに注ぎ込む手は止まらない。

「お前等なく、もっと危機感持てよ。油断大敵だぞ？」

伊志嶺はたしなめるが、依然として二人の手は止まらない。

「でもさー、伊志ちゃん。どうせここの提携校行くんだし、オレ等優先だろ？別に勉強してないわけじゃないんだし、問題なんて、死ぬか死なないかだけだろ」

矢崎は気味の悪い緑の液体を作り、銅板を沈めている。ほとんど

遊びだが、一応レポートには纏めているらしい。

「滅多なことを言うな」

「別に、報復とか言ってるじゃなくて、何が起こるか分からないって話。不謹慎かも知れないけど、相良が死んだの、誰が予測できたかっての。人間万能じゃないんだから、能力に驕ってるってヤバイんじゃないの」

「矢崎先輩って、キツイですね。ま、その通りだと思いますけど、その言い方じゃ相良が驕ってたように聞こえますよ」

「別にそうは思っていないぜ。っつーか刑部、相良好きだったもんな」
「素直で可愛かったじゃないですか。愛玩動物みたいでつい甘やかしましたよ」

「まーな。なんせ今年の一年は個性派だからな。相良はやたら可愛かったし、香月は美人で目の保養。瑞木は何か憎めないし、宮崎はからかい甲斐があつて楽しいし」

「瑞木は天然ですよー。こいつの数々の失敗が見事に証明してます」
春日がフレイムレスの眼鏡を掛けて、レポートと実験日記を示す。
その実例と睦瑳本人のコメントに盛り上がり、各々の実験を放り出して、騒いでいるときだった。

「!？」

綵菟は何か、嫌な気配を感じた。

何かは分からない。ただ、全身の毛穴という毛穴が開き、身体が勝手に震え出す。神経が尖りきり、頭がガンガンしているようにも感じている。そしてそのせいか、綵菟の目の前は赤い。

冷静になろうとすればするほど、心拍数が上がっているのが分かる。

獣ではない。だが、以前にも似たような感覚を覚えたはずだ。

「香月？」

そう。近い。柚弥の命を奪った『何か』は、とても近くにいます。

綵菟は確信した。四日前、柚弥は確かに殺されたのだ。

そのときに微弱な殺意と陶然とした気配は、今なら明確に分かる。

「香月！！大丈夫か！？真っ青になってる」

「いや既にドドメ色ツス、伊志センセ」

「土気色って言え、丸塚」

なんとも緊張感を欠く会話に、綵菟は意識を引き戻される。

だが、依然として不気味な気配は感じる。それどころか、近づいているようにも思う。

「俺は、平気…。でも、感じませんか？何か来る」

綵菟は思ったままを口にする。だが周りは一様に顔色を変える。気付いてすらいなかったのだ。

「綵菟。なに、これ…。こいつが…この気配の主が柚弥を殺したの…？」

「睦瑳…。方向、分かるか？アイツの…」

綵菟の方向感覚は狂っていた。まるで霧のなかで道を見失うように。

「駄目…。なに、これ。ありえない。強いよ。どうして、こんなに…押さえ込め……」

「睦瑳！！落ち着け。冷静にならなきゃ駄目だ」

それは睦瑳に向けているようであり、自分に向けた言葉だった。

意識を集中させても、位置は全く分からない。
それでいて確実に近づいてきているのは分かる。言うなれば、包み込む範囲が段々狭まっている感じだろうか。

「二人とも、どうした？ 様子がおかしいぞ」

「先輩たちは、感じませんか？ 何か、来る…」

「お前等、何か感じるのか!？」

龍崎が目を見開く。

「先輩たちは…」

「オレは観るの専門なんだよ」

「俺は半径五メートル以内に限りだ」

「感じられるけど、二人が言ってる気配は感じない」

桐生、田村、新川に口々に言われ、綵菟と睦瑳はようやく気付く。
自分達が特殊なのだと。

「うわああああ っ」

グラウンドの方から叫び声がする。

綵菟は窓から身を乗り出す。

眼下には、人だかりができていた。

その中心に居たのは、どうやら踞った人間らしきものだ。

綵菟が“らしき”と思ったのは、それがあまりにも凄惨な光景だったからだ。

うずくまった人間 それはやはり、制服を着ていた。
(なんで)

綵菟はまたしても有り得ない光景に目を見開く。

その生徒はどうやら、飛び降りをしたらしい。

背中を強打し、骨折もしているらしく、息はあるものの肩しか動く様子を見せない。

だがそれだけではない。

その生徒の左腕は、腹部に添えられている。

地面は砂だが、赤い。どうやら腹部から出血があるらしい。

綵菟が呆然と見下ろしていると、今度はまた、騒がしくなる。

全員で見渡せば、屋上、フェンスの外側に立っているのは、またしても生徒だった。

「……やだ。死にたくない。死にたくない。俺が何したって言うんだよ……！！こんなのおかし……」

衆人環視のなか、その生徒は、何かに背中を押されていた。

そしてそれは。

（見えない）

生徒は為す術もなく落ちようとしている。

目を凝らせば、どうやら手を縛られているように見えた。

恐らくフェンスにしがみつけれないようにするためだろう。

生徒は必死に抵抗していた。ぎりぎりまで足を踏ん張り、落ちまいと頑張っている。

そうしている間に、屋上に教師が到着した。

教師が三人、フェンス越しに生徒の手を掴む。

生徒はそれにすがり付き、泣き始めるのが分かる。

傍観者たちから一斉に安堵の息を洩らすのが聞こえるようだ。だが、綵菟と睦瑳はそうではなかった。

（まだ、いる）

姿は全く見えない。

ただ、苛立った気配のみが二人の肌を総毛立たせる。

早くしなければ殺されてしまう。

そんな予感がした。

（死は、平等だ）

他人事の死などないことは、分かりきっている。

（でも、個人の益のために殺されるのは…理不尽なんだ）

綵菟は走り出す。かつてないほどのスピードで。

化学準備室から屋上までは、物凄く近い。

出てすぐの所に階段があるせいで。

綵菟は一気に駆け上がる。

鉄製の扉は開いたままになっていたお陰で、すぐに入ることができた。

綵菟はそのままフェンスに駆け寄るが、生徒と教師以外にいる様子はない。

だが、気配は確実にある。

すぐ前方、生徒の背後だ。

だが余りにもその気配が大きすぎて、綵菟は細やかな動きを感じることができない。

よって、いつ動くのかも分からない。

「安心するなっ。背後に何かいる。急いでそこから離れ…っ」

綵菟は叫んだ。だが、結果として、それは逆効果だったのだろうか。

とりあえず生徒は逃げた。

だが、その生徒が二、三歩行くかのうちに、生徒がすがり付いていた教師　澤口から血飛沫が上がる。

固唾を呑んで見守っていた全校の人間が、目を覆い、或いは絶叫し、それは街に響き渡った。

見えない惨殺者、真昼の出来事へー（後書き）

やたら地の文が長いと本なら苦ではないのに、こういう媒介物だと面倒に感じてしまいます。

でも何かしらの描写がないとホラーは会話じゃ成り立ちませんから。

まあこれがホラーに見えるかどうかは別として。

見えない惨殺者、真昼の出来事へ二

その絶叫はまるで、世紀末が来るかのような、悲痛で行き場のないものだった。

大抵の者の声は裏返し、その叫びは正に恐怖を感じさせる。

澤口を見ている一方で、呆然とそんなことを考えるのは、無事だった綵菟だ。

だが実際は呆然としている余裕はない。そんなことは綵菟も承知していた。

綵菟に恐怖を与える何者かの気配は、未だに消えない。

呆然自失している綵菟を見て、嫣然と微笑む気配だ。

それは獣のそれとは違う、下卑て女くさい臭いがした。

香水とは違う。むしろ、香が焚き染めてあるような。

綵菟は何か掴みかけるが、生憎澤口の呻き声に思考が霧散してしまふ。

舌打ちしたい気分だったが、今は澤口の怪我の具合のほうが大事なのだ。

だが、またその女のような気配が動く。

意識を集中してその気配の動きを探ると、とても速い。

そしてそれは、先程の生徒の方へと向かっている。

そのことに、生徒と一緒にいる教師 榎原は気付いていない。

生徒も然り。

「榎原先生っ、気を付けて!!」

今度こそ助けたかった。何としてでも、血飛沫があがるその前にスプリンター並みの速度で移動していた女のような気配は、まさか綵菟に自分のスピードでも気配を察知できるとは思っていなかった

たのだろう、驚いたのか動きを止めた。

まだ殺気は発されていないのに気配を悟った綵菟の方に、その気配は向く。

「何の為に人を殺す？それはそんなに楽しいのか？そして、お前は何だ」

そのとき、くつくつと笑い声がした。それはもちろん、女のような気配がするほうからだ。

その笑い声はとても金属的で、笑い声を聴いただけでは、女か男か判断はできない。

「人に物を尋ねるときは、まず自分から名乗るものだがのう…。ほんに若い者どもは礼儀がなっていない…」

その声はとても粘着質で、何より時代がかった物言いと自分が優位に立っていることを指し示すような優等生的発言、そして泰然自若とした声音から、罪の意識を感じていないことが分かる。

「それは失礼だったな。だが礼儀云々を説く前に自分が礼儀を尽くされて当然だと思うな。尽くされたければそれなりの行動をしろ」
ぴしゃりと綵菟は言い放つが、気配は微塵も揺るがない。

「ふふふ…。面白い人間だのう。無条件に他人の下に付くを嫌うか」
「当たり前だ。お前も、ただ生まれだけで大した能力があるわけでもないくせに親の七光りで自分の上で権力を振りかざす人間がいたら嫌だろう？」

「嫌じゃのう。邪魔くさいだけではないか」

綵菟は微かに笑みを浮かべる。どうやら隷属を嫌うタイプらしい。もしも人間であるのなら、それはありふれてはいるが一つの情報には変わりない。

「そういうことだ。俺は相手を知りもしない癖に最初から優位に在ろうとする奴に礼儀を尽くしたりはしない。ましてや目の前でうちの学校の教師を傷つけた奴なんかになんてな」

「おやおや、耳の痛い。うむ、なかなかの人間ではないか。お主、もしかして珂櫛の人間か？」

「…ああ。一応は」

「そうか…。うむ、納得した。しかし勿体無いのう…。お主なら、如何様にも生きられようが…。あの家は悪い女が巢食つておるじゃろつ」

この女は何者なのかという疑問が、綵菟のなかで一層深くなる。何故珂欄の状況まで当てられるのだろうか。

「凶星かえ？あの女は質が悪い。自分の尺度でしか行動できぬ者じやわいなあ。ある意味可哀想でもあるが、さて…」

「可哀想、か。まあ無自覚なのを見るとな」

「お主はあの女に喰われる前に逃げた方がええぞ。その力、ほんに勿体無い。四色混ざったものは居なくはないが、如何せん色合いが悪い。それに比べてまあお主は良いとこ取りじゃのう。光によってころころ変わる。綺麗な玉のようで貴重じゃ」

「誉めたところでお前の罪は軽くなりはないが？」

「まるで妾が人間であるかのような口ぶりじゃのう」

屋上は風が強い。綵菟が女のような気配と会話をしている間に、澤口は槇原によって応急処置が為されている。もちろん、先程の生徒も手伝っていた。

『妾』という一人称から、やはり女であることが濃厚になる。

「人間だろう？決めつけたのが気に入らないのか？」

「そうじゃのう…。気に入らないわけではないが、悔しくはあるかのう」

「なるほど。お前はどこに住んでいる？何故この街の人間を殺す？」
綵菟は一気に捲し立てる。このまま煙に巻かれるのだけは嫌だった。

「さて、どこかのう。この街の人間を殺すとゆうても、それは限られるがの、この街の一部の人間には赤い赤い血がとても似合う。つまりはそういうことじゃ」

「快樂殺人症か？」

それならば分かる。そしてこの類いの人間にとって、この街は非

常に好都合であることも。

「おや人聞きの悪い。妾は罪ある者と、妾を観た者のみを殺す。罪なき者を殺すなど、外道のすること」

人を殺すこと自体が既に外道であるというのが一般常識だが、これでは情状酌量の余地があるとも言わんばかりだと、綵菟は思う。

「赤姫」

女の気配は唐突に言う。

綵菟は妙に納得がいった。口調も声音も考え方も、総てがそう呼ぶに相応しい。

「では、良き出逢いの記念に、血の舞いを」

赤姫はそう言うつと、遂に姿を現す。その姿は自分で言ったように赤姫。濃淡の差こそあれ、真っ赤な和装。ただ、着物の模様である蝶と髪が黒く、毒々しい。

赤姫が持つている得物は両手の鉤爪、丁度着物の袖に入り、良い塩梅だ。

顔は白粉で真っ白、目元は紫で着物と合わせて一層毒々しいが、不思議と似合う。唇は薄く、花弁の如く深紅の口紅が塗られていて一見して芸者のように見える。

そして、その素早い動き。

綵菟は目を見張った。どうりで速いわけだと思う。

赤姫の動きは実に優雅だった。

本当に芸者が舞うかのように流れるように動き、我に返った綵菟が追い付くこともできずに先程の生徒の所へ辿り着く。

赤姫が不敵に笑い、恐怖に怯える生徒に向かって鉤爪を振り下ろす。

間に合わない。綵菟がどんなに追っても距離は百メートル、それにかかる時間は十秒強、一方の赤姫が得物で生徒を殺すのにかかる

時間はその半分で済むのだろう、澤口のことから察するに。

綵菟は目を開けていた。

間に合わないのなら、せめて最期を見届けてやりたかった。

その綵菟の視界が、急に陰る。

その気配は唐突に現れた。

そして、綵菟はその気配の主を知っている。

それは勿論、綵菟はもとよりこの街の人間にとって重要な存在である。

（獣……）

因みに獣に名前はない。獣は古くから獣とだけ伝えられてきた。

それが獣の姿をしていようがしてまいが獣である。

現に、今は黒い布に覆われた人型をしている。シルエットはそう見えて、実際は違うのかも知れないが。

獸は赤姫と生徒の間、丁度澤口ともう一人の教師の真上に覆い被さるようにして立っている。

赤姫は鉤爪を振り上げた状態のまま静止し、秀麗な眉を寄せる。

「無粋な奴じゃのう…退くがよい」

赤姫の高圧的な態度に、綵菟は緊迫した状況にも関わらず思わず感心してしまう。

この街に古くからいたのは、紛れもなく獸だ。

赤姫の方こそが異邦人であり、彼女の重んじる礼儀を尽くすべき相手だと思うのだが。

獸は微動だにしない。ただ、赤姫を見据えていた。

「退くがよい。其は妾の獲物じゃ」

「少なくともこの街での断罪者は吾だ」

久しぶりに聞いた、獸の声。

あれから十年近くが経ったが、自分の記憶が褪せていないのがよく分かる。

獸の声は変わらない。

唸り声のような、所謂獸らしい咆哮とは違い、シルエットと同じく人間臭い。だが、姿から想像するようなバスではなく、バリトンのなかなかの美声。

一方の綵菟は声変わりしても大して変わらず、まだまだ低くなるのを期待しているのだが一向にその気配はなく、未だに女声の、それもメゾソプラノまで歌えるほど高い。

最早完全に傍観者に成り果てていた綵菟にとって、獸の声はいたずらにコンプレックスを刺激しただけだった。

「それは失礼したわいなア。しかし、その者には罪がある故、殺しても構わぬと思うのだが…」

「成る程。十年ばかり前から、身に覚えのない死が増えたと思っていたが、貴様か？」

獣の発言に、綵菟は納得した。

獣の報復を事前に察知できるのは自分だけ。

それは鳳征にもお墨付きを貰うほどで、綵菟自身にとって唯一睦瑤に勝っていると思えることでもあった。

だが睦瑤が獣に気に入られてからというもの、感知できていないのに、突然に誰かが死ぬことが増えた。

それは目に見えて言うほどのものではなく、だが記録を付けてみると、明らかにおかしかった。

事故死などといった些末な死は、一人で行動しつつ注意を怠ったり、投身自殺でもない限りは、この街ではありえないはずだった。それがここに来て十年は奇妙な死が続いた。そしてこの一ヶ月で、更に増えているように思う。それは明らかに異常だった。

赤姫は首を傾げる。下ろしたまま、結っていない黒髪が一緒に揺れる。

「はて、覚えにないのう…。妾がこの街へと来たのはここ一週間ばかりじゃが、殺したのは今日のを含めて二人しかおらん。ま、妾と同じ考えの者が他にいることは確かじゃの」

赤姫は相変わらず笑みを崩さず、いつそ傲慢なくらい落ち着いていた。

「成る程。そういうことならあり得るな。ところで、お前は何者だ？」

「妾のことは赤姫と呼べばよい。それ以外に説明することはない」

「赤姫か。確かにその格好なりには相応しい名だが」

「おやおや、齒切れの悪い奴じゃのう…。最後まで言い切れればよいと言つに」

獣の纏う黒い布がマントのようにたなびく。凪いだ風に揺れているにも関わらず、どういう構造になっているのか、黒い布から中身が見えることはない。それは、いつそ黒い布が獣そのものだと思う方がいとまで感じさせた。

綵菟は気配を消して、フェンス越しにグラウンドや校舎から屋上を見上げている生徒及び教師に向かい、大丈夫というサインを送る。そこはシンプルに両手でマルだ。

それと同時に唇に手を当てて、静かにしているように指示した。僅かな期待を込めて、綵菟は睦瑳の方を見る。

睦瑳は綵菟が屋上に駆け出した後、追ったりせずすぐにグラウンドに向かい、転落した生徒の方の応急処置をしたらしい。

丁度、救急車に運び終わった直後のようだった。

だがしっかりと綵菟のサインに気付いてくれて、周りに伝えているようだった。

（後は、獣に悟られなければいい）

綵菟は報復は嫌なことだとは思いつけれども、獣自体を嫌っているわけではない。

だが、もしもここで獣が睦瑳の存在に気付いて近づいて来たら、それは危険だ。

噂が本当たと知られれば、いくら瑞木家の人間でも、糾弾は避けられないからだ。

綵菟は祈るような気持ちで、赤姫と獣の方を見た。

「歯切れが悪い…か。まあ否めんな」

微かに獣が愉った。それに連動して、空気も動く。秋も深まる昼

下がり、この時期にしては暖かい時間帯だったが、屋上はそろそろ人がいるには限界だった。

綵菟はただ傍観しているだけだったが、流石に寒い。

対峙する赤姫と獣の姿は、ただ高く澄んだ空によく映えていた。

見えない惨殺者、真昼の出来事へ二〇（後書き）

赤姫と獣の最後の会話、要領を得ていません。

見えない惨殺者、真昼の出来事へ三

赤姫と獣は、対峙したまま、しかし何の行動も起こさない。

いつしか澤口の応急処置も一段落し、そつと運ばれていった。

当然赤姫も獣も気付いたが、特に気にした様子もなく、一瞥しただけだった。

風がまた強くなっていく。

一向に動く様子のない二人を、当初は固唾を吞んで見守っていた人間の内、この街の人間でない者以外は注視している様子はない。異常な事態であっても全国からやってくるエリートたちにとって大事なのは五限目の内容であって、屋上の事情でも、生徒と教師の安否でもないのだ。

睦瑳はその現状を見て絶望したが、それは彼らの自由であって自分に強制されるものではないことも同時に分かっていた。

“ブラックサレナ”のメンバーは相変わらず見つめていたし、いつの間に来たのか迫田もいた。

それでもやはり、屋上は静かだ。

睦瑳は綵菟を見たが、数分前にはアイコンタクトをくれた綵菟も、今は見向きもしない。

獣に気に入られているというのは、本当なのだろうか。

睦瑳には激しく疑問だった。

綵菟も柚弥も、それは根も葉もない噂だと言った。口さがない連中のことは、放っておけばいいと。それで駄目なら助ける、とも。

柚弥は死んだ。もう睦瑳には綵菟しかいない。“ブラックサレナ”があるけれど、それも高校をでてしまえばほぼ無意味だ。

自分が綵菟に依存していることは分かっている。今の睦瑳にとって綵菟が『世界』と『自分』とを繋ぐ橋だ。綵菟を失えば睦瑳は孤独になるのだろう。少なくとも雪廻町のなかでは異分子と捉えられる。たとえ睦瑳が瑞木家の人間だとしても。

綵菟は確実に何かを隠している。それは分かっていたし、有り難かった。少なくとも、変わらずにいられるから。

睦瑳はやや痛くなってきた首をさすりながら、再び屋上を見る。黒いビロードのような影が揺れていて、それが纏わりつく形にできたシルエットは男のものだ。

それが自分を気に入るなどと、誰が信じられるのだろう。いや、それよりも。

どうして獣を恐れるのか。

彼は殺していない。断罪も報復も、総て殺すようなものではなかった筈だ。

富に酷くなってきた報復を加えているのは、彼だというのなら、どうして彼から血の臭いがしないのだろう。全く感じられなかった。獣は本当に恐れるべき対象なのだろうか、睦瑳には分からなかった。

「瑞木。香月…いるんだろう？大丈夫なのか」

「迫田先生…」

「あれが獣、か。只の男のように見えるが…。いや、むしろ清廉されている。あれが獣だというのなら、俺たちは何なんだって感じだな」

「迫田センセ、大人だねえ」

「茶化すな春日。犬って呼ぶぞ」

「無茶苦茶じゃないですかあ」

横道に逸れた会話を隣に聞きながら、だがしかし睦瑳の心は暗々たるものだった。

（綵菟…）

睦瑳には危険なのは獣よりもむしろ、赤い女のほうに見えた。

獣は想像していたそれより遙かに凄い。他を寄せ付けない静かな威圧感が、どこか達観しているように思う。

対する女は着物に二本の鉤爪、仕草は上品だが、どこか下卑た感が否めず、そして行動も予測がつかない。それだけに、綵菟が心配だった。

まとまらない思考に苛つきながら、睦瑳はひたすらに綵菟の無事を祈った。

「さて、赤姫とやら。お前は人間だな？」

深く低く、そして通る声が屋上に響く。

だがそれでさえ、赤姫の表情を変化させることはできない。

先程から赤姫は口許に笑みを浮かべたままだ。

「さてなあ…。妾は何者なのかのう…。お主はどう思う？」

唐突に話を振られ、綵菟が躊躇したのは一瞬だった。

返す言葉は全く持っていなかったが、今はとにかく、直感を言うより他はない。

「人間だろう」

ここで断言しなければ、赤姫は飄々とした態度を崩さないだろう。また断言したところでそれが崩れるとは思えなかったが、話を進めていかないことには始まらない。

柚弥を殺したのが赤姫ではなかったとしても、なんらかの情報を持っている可能性は高い。何の力もない高校生が情報を得るには、頭脳をフル回転させるしかないのだ。

「ふふふ…。人間、か。お主は何故そう思う？」

「化粧をしているからだ。素顔を見られたくないのだろう？」

「おや、それは鋭い。その通り、妾は確かに人間じゃ。」

だが世の中には人間と同様の信号体系を持つものどももある。そのことを忘れぬほうがよいじゃろ」

「異端者であれば例え人間であろうとそれと同じだろう。お前のように」

綵菟が切り返すと、赤姫はさも可笑しそうに笑う。

「そういう異端者がどういう風に隠れるか、知っておるか？」

「あくまで常識人として振る舞う。自分が異端であることを理解している人間にとってそれは簡単なことだろう？俺たちが感じる良心というものが存在しないのならば」

綵菟が毒を込めて言うつと、赤姫は満足そうに笑う。

「お主も異端者になれるの」

「お前と一緒にするな。お前の規律は俺の規律にはなりえない。他を当たれ」

「できればこの街からも消えてもらおうか」

それまで黙って赤姫と綵菟のやり取りを聞いていた獣が口を挟む。そこに二人の本気の色を感じたのか、赤姫は下卑た笑いを浮かべて消えていった。

その気配はすぐに遠ざかり、都心の方向へと、紛れて感じられなくなった。

残された獣と綵菟は互いに静かに向かい合う。
それは懐かしくも切なく、そして重かった。

見えない惨殺者、真昼の出来事へ三〇（後書き）

もっと睦瑳に語らせてみたいです。
書いていてとても楽しかったです。
（超自己満足）。

見えない惨殺者、真昼の出来事へ四〇（前書き）

前半は鬱々、後半は突拍子のない造りになっております、御注意を。

見えない惨殺者、真昼の出来事へ四

獸に恐怖を感じたことはない。むしろ、哀れみを感じた。報復によつて人を裁く権利の話ではない。それは人間の勝手な物の見方でしかなく、押し付けるのは烏滸がましいというものだ、綵菟は思っている。

理不尽なものではない。

住民はそれを古来より知っている筈だ。獸が約束を違えないということも。

(どうして)

それ以外に言い様があるのか。綵菟は持っていない。

獸に掛ける言葉もなく、綵菟はただ立ち尽くす。

自分でも、獸に話しかけたいのか、それともそのまま去ってくれることを望んでいるのか分からない。

綵菟は昔から、自分という存在をはっきりと捉えることができない。

誰にでもある現象だが、綵菟はそれが慢性的になっている。綵菟の中ではつきりしていることと言えば、柚弥と睦瑳が好きで、柚弥が死んで悲しくて、睦瑳だけは守りたいという思いだけだ。それ以外にどうという感情が非常に希薄で、ついでに五感のうち味覚と触覚が積極的に働かない。綵菟が使おうと思えば使えるが、綵菟が必要と感ずること自体が稀だからだ。

自分に対する感情が極端に希薄であるのに、自分以外の者に対する感情はしっかりしている。総てに対しての感情が希薄であれば変人として扱われるが、綵菟の場合、そのことに気付いたのは鳳征くらしいものだ。

決定的に他者とは違うのに、余りにも誰も気が付かなかった。綵菟はそういう目で顧みられることもなく、ただ珂観の後継者という視点でしか捉えられたことがないのだ。

悲しくもなく、ただ日々を消化していくだけの単調な毎日が激変してきたのは、柚弥が死んでからだ。

綵菟は何であれ、この街が好きだ。けれども綵菟ですら気付かない水面下で、何かが変容してきていると、気付き始めた。

この街は世間から疎外されてきた。拒んできたと言った方が的確だ。

長い間、人の目には映らず、都や国からも忘れ去られ、独自の体制を築いてきた。

戦後になってからは外からの人間も増えたが、住み着いたりすることはなかった。それは今でも変わらない。

だが人々は、メディアの発展とともに変わってきている。

それは仕方のないことで、大学を出ると越して行く人間も少なくない。隔絶された地域の中で、何をかも知られた中での生活は、現代人にとっては苦痛でしかないのだろう。

しかしそれでも獣の報復を畏れて、結婚すればこちらに戻ってくる。

そんなサイクルを、獣を見遣りながら取り留めもなく考えているうちに、綵菟はあることに気が付く。

赤姫のような外敵は、もしかしたら

「怒らないのか？」

その言葉に綵菟は獣の方に焦点を合わせると、獣は傷ついた表情をしていた。

「…怒る？ 柚弥のことか…」

「死なせないと、約束した。だが…」

「柚弥が死んだのは、仕方がない。俺には全く、殺意も恐怖も前兆も…感じられなかった。殺意が感じられない以上、そっちが感知できないのも仕方ないと思う」

「そうか。だが、やけに醒めた意見だな。普通はもつと常軌を逸した発言をしたりするものなのだが」

「何人死んだと思っっているんだ…。これだけ死人が続いて、まだ」

獸が狂った”なんて言っているほうがおかしい。何時誰が何処で死んだっておかしくない状況で、自分や自分の周りは無関係だと思っ
ていられる程、俺はおめでたくない」

綵菟の切り返しに、獸は一瞬たじろぐ。綵菟がそんな意見を持つ
ているとは思わなかったという顔だ。

「それに、幾らなんでもおかしいだろう？死人は出こそすれ、怪我
人が出たわけではないんだから。“身近な人間の死”を使う、或い
は本人への直接的報復を選択し続けているだなんて明らかに馬鹿げ
ている。これは全てお前以外の仕業だ」

「断定か」

「誰も禁を破ったようには思えない。それは単純に俺の力不足もあ
るだろうけど、これだけ頻発している死に対して、恐れを抱かない
わけがない。皆、最近じゃ都心にも出ないから」

「報復を恐れて、か」

「そんなものだ」

綵菟の半ば呆れの混じった言い草は、既に年相応のそれを越えて
いる。綵菟本人はそれを充分に理解していたし大人ぶっているとい
う訳でもない、それは老成と呼ばれる類いだ。

綵菟は既にそれを悲しいとは思わない。その同年代との微妙な齟
齬は、集団生活が始まる前、綵菟の世界がまだ睦瑳と柚弥と家族に
占められていた頃に学んだ。

当時の綵菟は取り繕うことを知らず、ただ自分の意志に素直に応
えた行動を取っていた。

その結果、何でも淡々とこなす子供らしさを欠いた行動をとる綵
菟に柚弥が泣き、睦瑳が困惑を示した。そこで綵菟は、自分がおか
しなことに気付いたのだ。

もう10年以上も前の話だ。悲しむ段階も過ぎ、綵菟は本心を失
くしてしまう程に順応したのだ。

「人生をどう後悔せずに生きるかは人それぞれだとは思うが、本心
を忘れてしまえばそれは空虚で本末転倒だぞ」

そして獸は、そんな綵菟を見透かすように、いつそ残忍な程の言葉^{ことば}を浴びせる。

綵菟は深く瞑目し、深呼吸してから獸を見据える。

その目は白昼の太陽に透けて、強い青を示していた。

「それでも、まだ俺には大切なものがある。それで充分だ」

「屁理屈を。それだけで生きては行けまい。お前のそれはただの強がりだ」

獸の切り返しに、だが綵菟は笑って見せる。

何を以て自分を律するかなど、とうの昔に決めたのだから。

「強がりで結構だ。それだけまだ足掻く気持ちがあるなら、本心見失^うていようが関係ないだろう？ 少なくともお前が言ったように、空虚ではないな。本末転倒は認めるけど」

自分に一切干渉するなとは言えない。綵菟にとって他人は一種理解不能の不思議な存在だが、何も彼らが悪いのではない。それにそんな彼らが煩わしいけれども、同時に安堵もするのだから。己の殻に閉じ籠^{こも}ることも、一時期は考えた。けれどもそれでは何の解決にもならない。それが分からない程、綵菟は愚かではなかった。

「成る程な。面白い奴だ」

くつくつと笑っているのか、空気が振動する。

「ならば人と己の狭間に在る、と言ったところか」

獸がひとりごちるが、綵菟は聞き流す。言い得て妙だなと思いつつ。

「名は何と言っただろうか、珂觀の後継者」

「香月綵菟だ」

「香る月、か？ それなら普通は『かつき』と読むはずだろう？」
いずれにしても『かつき』じゃないかと、獸がいぶかしむ。

「さあ。父方の姓だし、よくは知らないけど」

栩月が語りたがらないのだ。だが茱鸛から聞いた話によると元々の姓は『島森』、それからまず両親の離婚があつて、栩月は母方に引き取られて『花房』、再婚して『顕上』、また離婚したために『

花房』に戻り、それから『真鍋』になって、もう一度『花房』を経験した後、ようやく今の『香月』に落ち着いたのだという。

事の真偽は別として、綵菟が実際に父方の親戚と会ったことがないというのが全てを物語っているとしたか思えないのである。

「そうか…。『あやと』はどう書く」

「あやぎぬの綵に菟糸の菟。根無葛の彩りつて意味だ」

別に葉緑素はなくてもメラニン色素はある、と反論したのは、もう遠い昔の話だ。

「あまり誉められた名前ではないな…」

「？根無葛が厭ならうさぎでもマメダオシでも木菟でも…」
では、綵菟。この街を頼んでも良いだろうか

そのあまりにも唐突かつ突飛な方向修正に、綵菟は目を見開く。

「え……………」

思わず、変な声が漏れる。何となく情けない音だった。

「この街を、任せる。そう言った」

「この街を空ける、ということか？」

「そうだ」

「外敵を、探すと？」

「そうだ」

綵菟は獣を見据える。成る程、黒い外套は旅支度のつもりなのか。良いだろう。お前の居ない間は、何とかする。だから 確かに情報を掴んでくれ」

風がまた、吹き荒れる。だが二人の声は掻き消されることなく、真っ直ぐに相手の耳へと届く。

それが何を意味するのか、綵菟はおろか獣ですら気付いていない。否、気付く余裕が二人にはないのだ。

「当然だ」

その低いばかりの声に、綵菟は微笑みを以て応える。

「そうか。 助かる。ところで、お前を何と呼べばいい。いつまで俗称で通すつもりだ？」

「…。そうだな。私の名前は雪營だ」
せつえい

綵菟はその名を聞いた瞬間、何かが引つ掛かる感覚を覚える。

せつえい。

せつ・えい。

雪・えい……………？

(雪廻町…！)

雪が廻る。

(そうだ。ではやっぱり…お祖父様の仰っていたのは…)

廻るに近い、『えい』の音。

営。だがおそらくは、營。異体字だろう。旧字と言っても良い。

「雪營……。雪が周りを取り巻く。そうだろう？」

獸がこの街を守ってきたことは、やはり事実なのだ。

「 珂櫛の賢しき後継者よ」

それはとても感情の込もった、心地よいバスの声。

「その声は一生高い」

綵菟は虚を突かれた。一体どういう意味だろう。思わず眉根を寄せる。しかし、何故断定なのか。

「声変わりは逆行する。ソプラニスタに戻るだろう」

意味が全く掴めない。声変わりが逆行するということは、声帯が短くなるとでもいうのだろうか。

因みに綵菟は当然のようにテノールだ。もう少し成長すれば、バリトンも夢ではない。

「案ずるな、血の特徴だ。双壁は陰陽、だがその代の後継者が同性の場合には両家が交代で声帯に異常が出る。今代は珂櫛の番だから、綵菟の声が逆戻りするということだ。 18の夏までに」

あまりにも突拍子が無さすぎて、綵菟には返す言葉が見つからない。

「安心しろ、女体化するわけではない。祝詞の都合上、両家を取り決めた誓約の一つだ」

雪螢は綵菟に言うだけ言った挙げ句、

「では 頼む」

それだけ言つて、掻き消える。

屋上に残ったのは、思考停止したままの綵菟と、乾いて茶色くなった血痕だけであつた。

見えない惨殺者、真昼の出来事へ四（後書き）

この回、書いてたら鬱々モードで延々…という破目になってしまったので、しばらく冷却期間を置いてみました。

そうすると、案外勝手にキャラが動きますね、やっぱり。

綵菟の声が逆行するとか、私十分前は知りませんでしたよ。怖いものです。

見えない惨殺者、真昼の出来事へ五

この街の始まりは遙か黎明の日本、奈良に都が置かれていた時代に遡る。

その当時からの住人のほとんどが、変わらずこの街に住んでいる。それが今日の能力を持つ人々である。

本来ならば膨大な人数になっている筈だが、実際には当時の十倍程度らしい。

そんな時代から現在まで、当時の家系は殆んど残っている。珂櫛や瑞木も例外ではない。

双壁を謳われ、この街を支える二柱の柱。分家を作ることはこの街では殆んどない。したがって現在は香月を名乗っている綵菟も、いずれは珂櫛に戻るということだ。

そんなことは、今はまだどうでもいいのだ。

少なくとも、現代日本に於いて姓によって人生が左右されはしな

いから。

だが、よりもよってその血によって人生が変わるかもしれない。綵菟は階段を下りながら、内心悲嘆に暮れていた。

（頼むから冗談であってくれ）

先刻の雪營の様子からして、冗談ではなさそうなことも解っている。だが、いくら綵菟でも認められないことはある。認めたくないことも、また然り。

（声帯が短くなる？何で退化しなくちゃならないんだ）

だったら最初から伸びないようにしておけばいいものを。

しかし、何故声だけなのか。生憎と、それは単純明快だった。

（祝詞のため…か）

溜め息を一つ、微かに吐くと、綵菟は投げ遣りになる。本当にとことん自分に興味がないのだ。

（まあ、珂欄に生まれたんだから仕方ないか）

そして、完全に何もなかった振りをして、化学準備室に戻る。当然、全員に囲まれる破目になったが。

「綵菟っ大丈夫！？黙に会ったんでしょ！！？」

「睦瑳…」

それでもやはり、一番に声を掛けてきたのは睦瑳だった。

「良く無事だったな、香月。無茶するな」

「あの女、一体何だった？」

「オレ黙見たの初めてだったぜ。けど、案外普通だったな」

「でもなんであの女と香月の間に介入したんだ？」

「案外香月気に入ってたたりして…」

「気に入られてんのは瑞木だろ」

「親友だからじゃね？」

口々に丸塚、宮崎、桐生、新川、矢崎、田村の順に綵菟に話しかけた挙げ句、話を勝手な路線に変更してしまう。

「じゃあ、やっぱり相良を殺したのは黙じゃないよな…」

それは、龍崎の重い一言だった。ガタイがよく、運動部での伝説

を数多く持つこの男は、裏番長と呼ばれる綵菟と張り合う唯一の男だが、かなり繊細でマメな奴だ。恐らくは柚弥の死に相当ダメージを受けていたのだらう。静まりかえった準備室の中で、綵菟が感じたのは、何とも言えない安堵だけであつた。

「功先輩…、獸を疑つてたんですか？」

功先輩、というのは龍崎の渾名だ。龍崎功介というのが、龍崎のフルネームだからだ。

呟いたのは宮崎で、名前は雄大といい、あまり似合わない名前だ。世に言ういじられキャラである。

因みに、他のメンバーの場合は、丸塚は茂成しげなりで青髪色黒の野球部の四番で、鬼のように強く、誰よりも練習熱心で容赦がない癖に気性がおおらかなために『野球部のオニサン』と呼ばれているし、刑部は孝太郎こうたろうという名前で、しかも美術部で彫刻をやっていたりするために『高村』と呼ばれているし、芳崎は敏哉としやという名で、2歳上で19歳の兄・和哉かずやがいて、そちらのほうは若手No.1の実力派俳優として有名だ。

春日は元成という名で、眼鏡の理論派なのに実験が大好きで、桐生涼太は現役生徒会長をしている。因みに副会長は春日で、後任は綵菟に任せようとしているのは、まだ生徒会の中だけの秘密だ。

新川治摩は坊主頭の応援団長で、水泳部のエースとして数々の大会記録を出してきた男だ。

三年の田村義仁と矢崎瑞樹は、共に学年トップで、二人共かなりのサディストである。

田村はレポートの管理が徹底した、かなり神経質な男なのに、血液型はAB型だ。

矢崎は見れば分かる通り、睦瑛の苗字と同じ韻であるために、まず家族以外で瑞樹と口にするものはいない。ちゃらんぼらんに振る舞ってはいるが根は真面目で、実験はかなり目を見張るものがあるため、伊志嶺が密かに文系であることを惜しんでいるという。

「疑うより他ないだらう。真相はどうあれ獸は一連の報復の犯人と

されてきたからな」

「……功先輩は……」

睦瑛が言おうとした言葉を引っ込めてしまうと、室内には沈黙が下りる。

如何にエアブレイクを起こすのが得意なこの面子も、綵菟と睦瑛が何も喋らなければ、話すことなど出来ない。虚勢でなく明るく振る舞っているが、事はそれを凌駕するものなのだ。

何より、幾ら人でなしの部類に入る矢崎たちであっても、親友の死に浸る時間はくれる。彼らもまた、この狭い箱庭の世界に産まれ育ったのだから当然、幼い頃より綵菟や睦瑛や柚弥の成長を見てきたのだ。

悲しくない筈がなかった。

けれども綵菟や睦瑛が感じた気配も感じられず、無力感に苛まれることもなかった矢崎たちよりも、綵菟と睦瑛が悲しんでいることはきちんと知っていたから、彼らはいつも以上にテンションを上げていたのだ。

伊志嶺や迫田も何も言わない。綵菟も睦瑛も、至って冷静で取り乱すことは少ない。特に今回のことについては諦めが先に立ったがために黙ったのだと、二人に分からない道理がなかった。

それから、沈黙を破る者が居ない中予鈴が鳴り、重苦しい雰囲気を引きずったまま、それぞれの教室に戻っていった。

結局、綵菟は雪營が外敵を探しにこの街を出たことを言えずじまいになってしまった。

綵菟が1年E組の教室の扉を開けると、そこは何も変わっていなかった。

元々、外部の人間が多いクラスだ。綵菟が屋上に居たことすら知らない人間もいる可能性もある。

綵菟は概ね普通の高校生であろうと思っていたが、どうやらそれは本当に『概ね』であるようだった。

流石に内部の生徒は心配そうな目線を送ってきたが、気付かれると厄介なのだろう、誰一人綵菟に声を掛けるものはいなかった。

窓際の自分の席に着くと綵菟はライティングの教科書を机の上に置き、曇天の空を意味もなく見つめていた。

見えない惨殺者、真昼の出来事へ五（後書き）

なんだか一日の話なのに、ちんたらちんたらやってすみません。
取り敢えず昼休みを終えた綵菟ですが、お祖母様登場ですよ。
…
やだなあ。

何故設定の段階であんな悪女＆無能×ろくでなしにしてみました
んでしょ…。

赤姫より救いようがない

終わらない一日

放課後、綵菟は部活が休養日なのをいいことに、終業後すぐに学校をでた。

行き先は当然、珂欄の屋敷だ。

雪廻町には山が一つある。私有地ではなく、かと言って誰でも気軽に登れる訳ではない。

この街の人間だけが、入山を許されているのだ。しかも、その中の更に禁足地、そこに珂欄と瑞木の本邸がある。

綵菟も睦瑳もそこには住んでいないため、居るのは両家の当主と伴侶、そしてごくわずかな使用人だけである。

使用人とはいえ、きちんと神職に就いている人々で、修行の意味合いも込めて、その年齢には幅があつた。

この街の人間は必ず、能力が開花しきつたら修行に來なければならぬ。そうして、次の世代に託すべきものを悟るのだ。

能力が開花し切るのは、一般に大体思春期を終えて、高校3年の秋口辺りと言われている。個人差はあるものの、どうやら17、18歳の間のようだ。

だから勿論、綵菟も開花し切っているわけではない。如何に能力が高くとも、それが最高点ではないのだ。

綵菟は山の麓の登山口にある鳥居をくぐって、石段を登る。近道としては裏道を馬で駆け登るといふのがある位のもので、活用されていたのは少なくとも戦前までだろう。今では専ら石段で登る。

途中に池があり、洞窟があり、滝があり…と、山としての環境は充分に楽しめるものであり、実際に子供たちはこの山で遊ぶ。危険なことと言えば、石段で転んで膝を擦りむくことと、滝壺に落ちないようにすることくらいなものだ。

因みに綵菟は昔、鳳征に滝にうたれて来いと言われ水行に臨んだ際、滝壺の裏側から階段が伸びていて、その奥の洞窟に天然石が溢

れかえっていることも知っている。それらは珂欄と瑞木が、修行者の修了の証として渡す品の原材料となっているようだった。

石段は全部で1万段を超し、5217段目に鳥居があり、すなわちそこから先は禁足地となる。

綵菟は黙々と石段を登り続ける。

秋の日の入りは早く、夕焼けで綵菟の影が長く伸び、やがて星が出る。月は上弦、明かりになるものは何もない。綵菟はただ、石段に従って登った。

山の中は静かだった。虫の鳴き声すらなく、そこは下界とは隔絶された神域なのだと思い知らされる。だが、普通の人間にとっては不気味この上ないだろうことも、当然承知していた。

この分だと泊まりになるだろうと、綵菟は踏んでいた。そのため、石段を登るペースは普通のそれであり、まだ鳥居は千段以上は先だ。鳳征と詩織は規則正しい生活を送っており、夕飯も6時半と決まっている。綵菟ならば小一時間もあれば着いてしまうので、なるべく普通の人間のペースで歩いているのだ。

祖父母とはいえ、一緒に食事は摂りたくない。何かにつけて小言を言われるのは、今の綵菟にとっては一番避けたいことだった。

長い階段を登り終え、そこに広がるのは木々ではなく、林立し、そびえ立つ建物ばかりだった。そして、綵菟は特に何の感慨もなく日本庭園の横を抜け、神社の前を通りすぎ、祠を素通りし、入ったら迷子になりそうな日本屋敷の奥の更に巨大な洋館の前庭を横切り、北に向かう。

因みに日本家屋は儀式の為に使用されるのみで、今は誰も住んでいない。壮大な洋館は建坪だけでも1300坪を数えるのに、庭園や池などを入れると1700坪にもなる。これは瑞木の館で、現在は当主夫妻とその弟妹、そして38名の使用人がいる。今も灯りが点っており、明るい声が響いてきそうな雰囲気だ。

北へ向かうと、今度は更に巨大で荘厳な洋館がある。こちらは建坪1900坪、全体で2400坪にもなる。こちらが、珂欄の館だ

った。

共に日本でも最大級の豪邸であるが、勿論、その事実を知っているのはこの街の人間だけだった。

綵菟は噴水の前に立ち、手の汗を軽く流す。

鞆を持つ手が汗ばんで、気持ち悪かったのだ。

そうしてから、屋敷の方に向かう。

ここには呼び鈴はなく、綵菟は勝手に鍵を開けて入ってしまう。

今の時間帯、詩織は自室の筈だ。いくら綵菟が来るからといって、彼女の生活リズムが狂うことはない。

綵菟は真っ直ぐ詩織の部屋に向かった。

「お祖母様。綵菟です」

ノックしながら言った声は、通常のそれより遙かに低い。不機嫌な調子を少しも隠そうとしていない声だった。

「そう？綵菟なの？待っていたわ、入って」

猫なで声だ。とはいえ詩織はいつもこうだ。甘ったるくて一口目でダウンしてしまいそうなケーキのように、綵菟には合わない。

「失礼します、お祖母様」

「相変わらず他人行儀ね、綵菟。でも相変わらず顔は綺麗だわ」

貴女も顔だけならね、と綵菟は心中で毒づき、しかしそれをおくびにも出さずに、あくまで他人行儀に接する。

「お祖母様の方こそ、お変わりないようですねによりです」

「まあ、ここは山の中だもの、そう大して変わったことなどないわ。ここは聖域だもの、獣も来れないし」

「ですから、お祖母様。獣は……」

「敵よ。敵だわ。それ以外に何だと言うの？」

「この街の守護者です。それは太古より変わらぬ事実で、敵ではありません」

「守護者ですって？まだそんな世迷い事を言うの？」

詩織の声は、あくまで甘い。蜂蜜か、カラメルソースのような感じだ。べたべたと粘着質で、メイプルシロップのようなさらさら感

はない。

「世迷い事を仰っているのはお祖母様の方です。一連の死は、獣の犯行ではありません」

「何の根拠があつてそんなことを言つた？ 綵菟」

「自分がそう感じたままでです。そして今日、獣に会いました」

詩織の表情が凍りつく。それで綵菟が無事なら、自分の言っていることは全て否定されてしまう。仮に獣が敵であつたとしても、綵菟は襲われる筈がないということは、詩織は知らない。

「彼の真名は雪營。雪廻町の名前の由来でもあります。お祖母様は、何故にそうまでして雪營を敵視なさるのですか」

淡々と、綵菟は言葉を重ねる。詩織はもう、綵菟には敵わない。

「理由など……」

「雪營に罪をなすりつければ、それで街の人々が安心すると？ そうお思ひになつたとしても言つのですか」

「そうよ。その方が……」

「それでは外敵の意のままだということが分からないのですか」
「……」

「彼に罪はありません。お祖母様、明日にも、その旨を街の皆に謝罪して下さい」

詩織はゆっくりと頷いた。綵菟にはもう、次期当主としての威厳や風格が付いてきているのだ。

「それで、お祖母様。ご用件は……」

「いえ、もうそのことはいいの。お祖父様にも呼ばれているのです。よう？ 行きなさい」

「そうですか。では失礼致します」

綵菟は言い捨てて、足早に詩織の部屋を後にした。詩織の纏う粘着質な空気と、薄汚れた感じが堪えられない。世間一般では退廃的というのだろう詩織の、50がらみの女とは思えないような美貌も、綵菟に言わせればその程度でしかないのだ。

綵菟はそれを振り切るようにして、隣の鳳征の部屋に駆け込むよ

うに入った。

「綵菟か。遅かったな」

「すみません、お祖父様。お祖母様との話が長引きまして…」

「相変わらず堅い言葉遣いだな、綵菟」

「これでも砕けている方です」

「まあ、御師と呼ばなくなっただけよしとするか」

「そんなに嫌ですか？」

「……綵菟、私たちは家族だろう？」

「『私たち』というのはお祖父様とお祖母様のことですか？」

鳳征は口ごもる。綵菟は聡い。まだ若く、切り捨てることに何の躊躇いもない。

茉鷗のために詩織と縁を切れない自分とは違うのだ。

「そんなことより、今日呼び出したのは…」

「お前の、身体の件だ」

綵菟の背に、緊張が走る。細く長く、そして深く息を吸い、そつと目を閉じ瞑目する。

長い長いこの日は、まだ終わる気配を微塵も見せない。

終わらない一日（後書き）

本気でこの日は長いです。綵菟の体感時間で一週間くらいかと。

願いと偽善

綵菟はいつも、不思議に思っていた。何故、鳳征は詩織と結婚したのか。跡目を継ぐように言いながら、どうして栩月を婿養子にしなかったのか。

雪營は何故、この街に存在するのか。黎明の世に何があつたのか。何より、この街の人々の、一種奇異な瞳と髪と肌は何を示すのか。その答えを鳳征は持っているのではないかという期待はしていない。

雪營には雪營なりの理由があるだろうし、鳳征の話す話はいくまで伝承でしかないのだろう。伝承は人為で如何様にも曲げられる。それでは意味がないのだ。

「それで？俺の身体が何か？」

「身体という程でもないだろうが…、声だ。恐らく幼児期と同じ位か、それ以上に高くなるだろう」

綵菟は知っていた。驚いてみせることもなく、鳳征を見据える。

「それ以外に何か？」

「いや、声だけだ。他に影響は出ないだろうが、日頃からなるべく低い声が出せるようにしておくといい。それだけだ」

「随分、適当ですね…」

しかし、忠告されたあとだけに、思ったよりも低い声が出てしまう。まだ兆候はないし、喉が引きつることもない。

「それでいい。そうしていてもいつかは通常の声より高くなってくるだろう。そうになったら止まらないらしいからよく観察するように」

「はい」

綵菟は一礼して、これ以上何かを言われる前に退出してしまう。今日は長い。一度に色々起こりすぎて頭がオーバーヒートしてしまいそうだった。

帰途、綵菟は山の頂きから街を見下ろす。

洗練されたモダンデザインのビル郡が幾何学模様を整備され、この街の自立を感じる。日本にあつて日本ではない感じであつた。

この街には有名企業の工場も販売所も支社も　　全国展開のコンビニすら存在しない。

コンビニもスーパーも学校も企業も全てが雪廻町のものである。雪廻町にあつて他のところにはないものはほとんどないが、他の街にあつて当たり前のもはこの街には幾つか欠けていた。

賑わいはないが満たされた街。それはこの街に古くから生きてきた人間にとってはこの上なく居心地がよく、裏切ることを忘れさせる。

居ない筈なのだ。本当の意味での裏切り者は。

古来より、裏切りは数え切れない程あつた。それら全てが詳細に、珂欄と瑞木両家に記録として残されている。

積極的に外に出ることで内部を守ってきたこの街を、狙う輩がいる。それだけだ。

それを雪營が突き止めに行き、綵菟はこの街を見張る。

綵菟は寝静まつた街を見下ろし、今この街に赤姫や他の敵がいな
いことを祈りながら集中し、目を閉じた。

月光に綵菟の髪が赤く輝き、その色は徐々に存在感を増していく。
瞳は青く、だが虹彩は何色にも移ろう。呼吸をする度に、白い肌は

真珠のような輝きを全身に波打たせる。

すると風が緩やかに綵菟を撫で、雲はある一点を指し示す。綵菟が目を開けると同時に流星が降り注ぐ。 綵

（いる。けど…23区か。人に紛れている）

それでは手の施しようがない。相手はかなり場馴れしているようだった。

その様子を、洋館の自室から鳳征が見ていた。

綵菟の広範囲察知は、鳳征を遥かに凌ぐ。それも綵菟は万能だ。最早ただの勘でなく、正確に把握し、しかも人だけでなく無機物やその他の物など、大抵街に溢れている物は掴めてしまう。人の場合は性別や年齢まで察知できるし、この街の人間の気配なら全員名前まで当てられる。

そして、それは睦瑳もできるのだ。亡くなった柚弥も、やはり同等にできた。

あの三人は異常だった。

綵菟の混ざった色、睦瑳の獣による執着、柚弥の双璧に引けをとらない能力。

そしてその均衡が崩れた。

何が起こるのかは分からない。だが、鳳征は可愛い孫息子がどうか無事であることを切に願い、綵菟を食い入るように見つめていた。

その後、綵菟が帰宅すると時計は12時を回っていた。

今さら食事に手をつける気にはならず、弁当箱を洗ってから風呂に入ると、そのままベッドに直行する。

「綵菟。眠れないなら睡眠薬をのみなさい」

張りつめた顔で階段を上ろうとする綵菟に、棚月が声を掛ける。

「父さん……」

「僕には正直何が起きてるのか分からないし、緊張しない方がおかしいのかもしれないけれど、僕は父親だからね、息子に倒れられるのは勘弁だから」

穏やかな笑顔で、棚月は諭す。

綵菟はにこりともしなかった。否、できなかったのだ。一度に色々ありすぎて感情が麻痺しており、棚月の言葉も上滑りしていく。

「有り難う。でも、一つ訂正を」

綵菟は残酷な言葉だと知っていて投げつける。心遣いよりもなによりも、綵菟はそれが父親への唯一つの不満だったから。それを分かろうとしない棚月に嫌気が差したから魔が差したのだ。

「貴方は分からないんじゃない。分かろうとしないんだ」

只この街の人間ではないからという理由で、襲撃されない保証はどこにもない。いつまでも傍観者ではられない。

認められないのは仕方がない。けれども一連の事件を見て、肌で感じて、それでも動かないのはどういう見なのか綵菟には理解できなかった。

棚月がいつまでも自分を部外者だと思っているからなのかも知れなかったが、自分で何が起きているのか分からないと言っている以上は警戒するべきなのだ。絶対の安全などないのだから。

棚月は押し黙ったまま、立ち尽くしていた。

願いと偽善（後書き）

綵菟は睡眠不足でイライラです。ほとんど八つ当たりです。父に
対する敬意はほとんどありません。思春期なんでしょうね…。

後日談としてはこの日の夜も眠れなかったようです。

情報収集へ上 (前書き)

情報収集…のハズが。本題に入れず七割方どうでもいい話に。

情報収集へ上

翌日綵菟は街へ出た。

土曜日ということで僅かな賑わいを見せる街を、綵菟はどういうこともなく通りすぎる。一月前ならそこかしこにいた琳鋭高校の生徒も、今は全く見当たらない。街に出ているのは専ら外部の人間ばかりだ。彼らにとってこの街は、最新のものがなんでも揃う癖に都心より断然空いている、最適な環境なのだ。

だから、外部から来た人間は大抵この地に就職する。閉鎖されているが、中の人間にとっては他の場所が色褪せるほどの魅力に満ちているらしい。

国も都も一切関与しないこの街は、ある意味最も地方自治の進んだ地域であり、その有り様は日本にありながら全く別の国のようでもある。

綵菟はまず、書店を回って地図を購入する。地方毎の細かいもので、荷物は一気に重くなる。かなりマイナーな島の地図もすべて購入して、綵菟は一旦家へ戻る。

綵菟の自宅は広い。一階と三階にリビングがあり、二階にそれぞれの自室と夫婦兼用の寝室、和室も洋間も各階に十畳ずつあり、客室は一階に三部屋、年末年始にしか使わない特別な部屋もある。書斎は二階と三階にあり、二階は主に棚月が、三階はそのフロア全域を含めて綵菟が使用している。

その書斎に地図を入れ、綵菟は開くでもなく再び外出する。

今度は駅に向かい、都心の方向へ行く。この駅も路線も、すべて雪廻町のものだった。

電車で揺られ、東野という所で降りる。ここは新宿からも近い癖

に23区ではなく、しかも古い町並みを残すところだ。

その一角の広めの一軒家に入る。

ここは“クリムタ”と呼ばれるカフェで、ある私立中学の生徒及びOB御用達の隠れ家だった。

系列的な問題で、その私立中学は雪廻町のものに似ており、綵菟と睦瑳と柚弥はそこで三年間を過ごした。それは珂欄、瑞木両家の指示でそうしたのであって、綵菟たちの意志ではなかった。

だが案外居心地がよく、充実した時間を過ごすことができたのも事実だ。

その一つが、この店だった。

一階は普通の隠れ家ティストなカフェだが、二階と三階は宿泊自由な憩いの場となっている。テスト前になると勉強会として中高生が占拠していたり、こともあるうに政府の要人が同窓に愚痴をこぼしていたりもする。

トイレの横の掃除道具用のロッカーに見せかけた階段を登り、携帯電話で指定の音楽を流す。ここのセキュリティは難解で意味不明なシステムになっていた。

店内を見渡すと、朝だというのに人はそこそこ入っている。

ダベっている、というのが正しい表現であるが。

綵菟は空いている席に座って、人を待つ。直ぐに店員がやってきて、頼んでもいないのにブラックのブルー・マウンテンとバジルのパンと水菜と大根のサラダを置いていく。サービスではなく、綵菟の好みにあわせて運んできたのだ。

焼きたてのパンを頬張りながら時間を潰していると、一人の少年が入ってくる。そして迷わず綵菟の所へやって来た。

「わりい、待ったか？」

少年はブラックのトラジャ・コーヒーとプレーンのパンにジャムと生クリームの添えられたものにベビーリーフと水菜のサラダを受け取りながら、綵菟の前に座る。綵菟とこの少年の好みは結構似ていた。

「いや、別に。　優太と璃奈は？」

「あー、優太はもうちょいで来るだろ。璃奈ちゃんは…まあ忙しいから……」

少年が言葉を濁した途端背の高い、否高すぎる少女が入ってくる。その少女も綵菟たちの所に来て、ブラックのエスプレッソに蟹雑炊の大盛りを受け取りながら少年の隣に座る。

「すみません綵菟先輩、王共莫（きょうこ）きょうは王に共で一字なのですが、変換できないのでご了承ください」先輩。遅くなりました……」

少年は海咲王共莫という。綵菟の同窓で、同率で首席だった。現在は日本のトップと言われる星条高校に勝るとも劣らないレベルを誇る緋鳳学園に通っている。親は既に亡くなっていて、二人の兄に育てられてきており赤貧生活を送っているため、奨学金制度の優れている方を選んだらしい。

一方の璃奈のフルネームは二ノ宮璃奈と言い、一卵性双生児で妹がいる。共に身長は異常に高く、その癖に璃歩はともかく璃奈は帰宅部だ。綵菟が在校していた頃も学校のアイドル状態で、他校の生徒が校門に群がっていたりした光景も日常となっていた。

「…羽越先輩はまだ来ていらっしやらないんですか？」

「ああ。　けど、どうして達明じゃなくて優太なんだ？」

「真名部連れてきたら間違いなく本題に入れねえだろ」

王共莫は色素の薄い瞳を冷冽に煌めかせて綵菟を見る。その瞳は面白そうにも見えるから、綵菟には不思議だった。

「お前こそ、睦瑳は？柚弥が亡くなって最初の休みだぞ？気晴らしでも何でも、連れてこなきゃまずいだろ」

「…っ、それは……」

綵菟は正直、痛いところを突かれたと思った。本題、と呼ばれる用件にはかり気をとられて、睦瑳のことなど全く頭になかったと言うのが本当のところだ。

「…王共莫先輩、意地悪し過ぎです。綵菟先輩も、余裕なさ気です

し……」

璃奈はその大人しい外見に反して直球だ。勿論外見通りに口数は少ないのだが、それだけに一言の重みはかなりあるのだ。

「……ごめん、後で睦瑳に謝っておく」

綵菟は純粹に反省した。一番の被害者は睦瑳なのに、自分はそれを無視していたのだから。

だが、目の前の二人の反応はというと、

「……やべ、俺……不味い？」

「……綵菟先輩に王共莫先輩の冗談が冗談で通じる訳ないじゃないですか。羽越先輩でも無理だと思えますけど……」

王共莫が璃奈に説教されていた。

綵菟は初めて見るその光景に目を丸くする。璃奈はほとんどぼーっとしていて掴み所がなく、相手に対して下手に出ることが多い。先輩に対して説教をするなど、以前の彼女からは信じられないことだった。

「璃奈、少し変わったな」

「……そう……ですか？」

「そういえば、璃歩は元気か？」

適当な話題を振って時間を潰す。優太が遅いのが悪いのだ。

「……元気ですよ。来ると鬱陶しいので、目一杯雑用押し付けてきました」

どこかすっきりした顔で話す璃奈も、綵菟の見たことのないものだった。

「……性格悪くなった？」

「……寝不足でイライラはしてますけど……、すみません」

璃奈は途端に小さくなる。大量の資料の入った鞆を抱えていると、身長がそれほど気にならないが、それが更に小動物に見えてしまうから不思議だった。

璃奈は楽な後輩だ。

常に正論を突きつけては来るが、性格は非常にサッパリしている。

化粧つ気もなく、華美ではないが上品な服装を好み、何より頭の回転が速い。一体どんな仕組みかは知らないが、彼女のネットワークは異常に広く、どんな情報でもほぼ全てが揃う。押し付けがましいところがなく、天然で、未だに睦瑳に好意を持たれていることにも気付いていない。

反省した一端には、それもあつたのだが。

確かに璃奈は、客観的に見ても可愛かった。それは綵菟も認めている。

「璃奈ちゃんてさ、誰かと付き合ってたらしいわけ？」

「…王共莫先輩？」

「告白とか多いんでしょう？ ストーカーとか」

「…っ。でも、その…基本男嫌いだから……」

璃奈は誤魔化すようにコーヒーを飲む。

「確かに、璃奈ちゃんて男友達って俺らくらい？」

「いえ、あの…これって友達って言うんですか？」

言われてみれば妙な関係だ。綵菟も王共莫も先輩であり、璃奈は後輩だ。お互い必要なときにしかつるまず、卒業以来再会したのがこの間の柚弥の葬儀だ。その間、メールも数えるくらいしかやり取りしていない。

「確かに、ただの先輩・後輩だな」

「ですね。…まあそういうカテゴリーでいくと、真名部先輩とか羽越先輩とかも含みますよね…」

「最初から含んでやれよ…」

綵菟は呆れてばやく。璃奈は正直よく分からない。先輩に対する態度そのものは普通だが、同級生や下級生相手になると途端に無口になる。理由を尋ねれば、年上しか相手にしたことがないらしく、出方がまったく分からないのだという。一体どんな環境で育ったというのだろうか。

「…でも、話を戻すと、同級生だと丹羽さんとかあの辺りとはお弁当を一緒に食べたりはします」

「友達じゃん」

あつさり王共莫が決め付ける。恋人という線を考慮にいれる必要がないと判断したようだった。

「そうですね。…友達です」

「だけど、丹羽かあ…。あいつ彼女ほつといて大丈夫か？」

「それは…まだ女の子って、友達と居たい時期ですし…お互い照れ屋なカップルですから…」

「確かに…」

丹羽は綵菟と王共莫の所属していた美術部の後輩だった。

因みに璃奈は数少ない帰宅部だ。妹の璃歩の方は園芸部にいるというのに、璃奈は璃歩よりも多忙らしいのと、入部合戦で各部の争いが激化し運動部と文化部に分かれて全面戦争に突入し、学校内で授業をサボタージユした揚句ゲリラ戦までやってしまいうらいの大騒動になったために、特別に許可されたのだ。

璃奈は転校生で、去年の夏に来た。

そしていきなり夏休み後のA・L・Eテストと呼ばれる、夏課題とスポーツテスト以外生徒会主催の一週間地獄を味わうことになる（強制的・サボると全教科卒業まで赤点）入る高校は完全実力主義しか不可能）テストで首位に立ち、一週間で伝説を作った。それが原因で、入部合戦が勃発したのだが、璃奈はその間完全無視だった。

噂によると、クラスの大半が本人を目の前まへにしているにも関わらず、廊下で鈍器を振り回している仕末だったらしい。

その教師も強者で、どうやら動ずることなく一日中（教師も戦争に参加して来なかったため）璃奈と次席さしの怜あやに全クラスを廻って問題の答えを黒板に書かせていたらしい。王共莫や綵菟のいたクラスにも来て、異常なスピードと完璧な明朝体とゴシック体でしかも二刀流で書き、そして暇だったのか、ノートに私立の予想問題を書いて去っていった。

それも伝説となったが。

なにしろ、その年の私立の入試で、少なくとも緋鳳、琳銳、白木

原などの超難関高校に於いて、璃奈の作成した予想問題から一文たりとも外されてはいなかったからだ。

様々な伝説を持つ璃奈の欠点は、未だに誰も見つけていない。

そして極めつけが、三学期の璃歩の転入だ。家庭の事情で消息不明なところを、冬休みに捜し回ったらしい。

事情を聞けば生き別れたのは一歳の時らしく、それだけで全く別の名前で生活していた妹を捜し当てるところも、綵菟にとっては疑問だった。

もはや人間ではないのではないかと、本気で疑っていた。

今はそんなことはなかったが。出会った当初は宇宙人のように思えたが、違うのだ。

璃奈は現実には生きているようで、実は微妙に違う。璃奈には現実に対する執着は全く見られない。

そして、同じく現実には齟齬を持つ綵菟とも違う。

綵菟の最大の齟齬は価値観などのものの考え方だ。だが、璃奈は違う。綵菟と価値観は同じだが、彼女は何かに突き動かされている。恐らく、璃奈は何処へ行っても終わりはしない。だから理解できないのだ。

王共莫も、そうだった。

だから似た者同士が集まったのかもしれない。

この輪に睦瑳を入れようとすら思わなかったのも、多分そうだ。

綵菟がそんなことをつらつらと思いながらコーヒーを見つめて、ふと顔を上げると、璃奈が穏やかな顔で見ていた。

璃奈には綵菟の心など、綵菟よりも遙かにお見通しのような
。た

情報収集へ上（後書き）

璃奈と王共莫の設定は、綵菟よりも深いです。

特に璃奈は年季も入っていて、しかも自分からバックグラウンドを喋ることはしないので、綵菟の記憶を使って人為りを説明するしかなかったのです。

一応言ってきます。

璃奈も王共莫も過去の友人ではありません。重要キャラです。

そして璃奈の説明だけで終わったのは、貴様のせいだ羽越優太！！
おまけの癖に！！

ホラー…だった筈、なんだけどなあ…。

なかなかそこまで行かないですねえ。

序盤だけで一年近く掛けてるし、璃奈とか王共莫とか正直出す気
なかったし…。王共莫の字は常用漢字の癖に出ないし。

完結しなかったらすみません。頑張ります。

情報収集へ下

「ごめん、遅くなった!!」

ロックが解除される音が鳴った瞬間に乱暴に開け放たれたドアから綵菟たちに、息を切らしながら謝るのは、羽越優太だ。

「羽越先輩…大丈夫ですか？」

「まあ、多分。っていうか、もう。何で僕が纏めなきゃならないんだろ」

「何かやってるのか？星条で」

「緋凰でもやらない？課題研究」

「あー…。琳鋭は？」

「…毎日が課題研究みたいなもんだ」

毎昼休みになると実験レポートまとめて提出している。文化祭のときに張り出されたり、悪いとコンクールに出されたりしてしまう。僕のグループ、全員地方からで、そろいもそろってガリ勉なんだよね」

そういった手合いの連中は琳鋭にもいる。彼らは総じて面倒なことを嫌う。実験をしてその目で確かめるよりも結果を知りたがる。

やりたくないことには徹底してやろうとせず、結局は自分の首を絞める結果になっているというのに。

「そんな人たちにトップに立って欲しくないよな」

「そうですね」

優太はロイヤルミルクティーを飲み干し、ふいに真顔になる。

「それで、収穫はあった？」

空気ががらりと変わった。

時は少し遡り、柚弥の通夜の日。綵菟は葬儀にも通夜にも参加した。通夜の翌日なのが普通だが、友引で一日んだが。

赤い制服では目立つだろうと思った璃奈が喪服でやってきて、焼香をあげる。

その様子を見るともなしに見ていた綵菟は、それが誰なのか気が付かなかった。

璃奈の髪は綵菟よりも更に明るく、原色に近い。

だがその日、璃奈は黒いウィッグをしていた。

だから、話し掛けられるまでまったく気付かなかった。

「綵菟先輩…ですか？」

気付いたのは、声だった。

「あ…、璃奈？」

「はい。すみません、こんな格好じゃ分かりませんよね」

「…まあ、分かりづらいけど、声とか身長で」

「…背はサバ読みようがないですから」

綵菟が察するに、璃奈は結構身長に対してのコンプレックスは少ない方だと思う。

だが、璃奈の性格から言うと、少々目立つのが悩ましい。

今も目線が集中しているのを嫌そうにしている。

「…外に出るか」

綵菟は取り敢えず璃奈を連れ出そうと促す。

「有り難うございます。…あ、王共莫先輩、羽越先輩」

久々にそろった面子で、外へ出る。不穏な風の吹く曇天の中の再会は、奇妙なものだった。

「改めまして、先輩。お久しぶりです」

「「久しぶり」」

「挨拶もそこそこに、ですが」

璃奈の声は微妙に強い。静かな怒りが全身に満ちているようだ。

「柚弥先輩は何故殺されなければならなかったのでしょうか」

綵菟が璃奈を見上げると、璃奈の顔には何も無い。恐いくらいの無表情、それは全くの虚無で、けぶるような睫毛に縁取られた瞳にすら、一切の感情を感じさせない。只、全身からの怒気は依然として残っている。

「璃奈。王共莫も、優太も。頼んでいいか？俺が内部から調べるのは当然だが、敵が分からない以上、外からのアプローチも重要だからな」

璃奈の情報網とハッキングの腕前は異常なくらいに高い。

また、その兄である響も同様に高いことを、綵菟は知っている。綵菟自身それなりの腕は持っているとは思うが、偶然発見した璃奈の個人データには過去の記録がスッパリない。運営上の問題で個人ではそのデータを書き換えることが不可能なため、彼女が何らかの機関と繋がっている可能性も視野に入れている。

因みに璃奈のデータには、6歳から10歳までの間は主にニューヨークで生活をし、天才教育を受けたこと、既に各種博士号の取得もしており、義務教育でもなければ学校など通う必要もない履歴を持っている、ということしか書かれていない。

一方王共莫だが、こちらもなかなか凄い。

海咲家は非常に貧乏で、緋凰学園にも三年間クラスがCクラスまで落ちなければ学費その他諸々全て免除に加え、奨学生専用の自習棟まで与えられるという超好条件で星条を諦めたくらいだが、資質は高い。しかも王共莫はそれだけには留まらない。

王共莫の両親は既に他界しているが、兄が二人いる。

一人は駆け出しの弁護士、一人は将来有望な大学生だが、関係者は広い。特に、理由は語らないが宗教や神社の関係者の知り合いが多いらしい。

そつちに関係がある可能性も高く、非常に期待できるのだ。

羽越は特に期待していないが、彼もまた高い能力を持っている。サポートと大穴狙いだ。

「分かりました。…次は…：…そうですね、週末に一度“クリムタ”で会えますか？」

「そんな短いと…そんなに進展しないだろ？学校もあるし」

「…付けられるだけの目星は付けておきます。後はそれぞれのツテを最大限に利用して、次の被害が出る前に対策を取らないと」

璃奈の顔は真剣だった。明らかな雰囲気の変化に、これが璃奈の本性なのかと思わされる程だ。

けれどもそれこそが璃奈の恐ろしいところだと、綵菟は知っている。

璃奈はどの場合も全てが本物だ。

それは彼女の一面を見せられるだけで、まるで本性が見えない。それが全て本性であり、そうでないからだ。

それはまるで玉葱のように。

「…分かった。二人とも都合はつくか？」

「俺は大丈夫だ」

「僕はちよつと遅れるかも。でも、午後なら融通がきくから」

「じゃあ、土曜の午後1時半にクリムタの二階の方で会いましょう」
璃奈が軽くまとめ、煩そうにウィングをとる。現れたのは編み込んで究極まで短くした、明るい色の髪。彼女には非常に似合っている。しかもそれが天然色だというから、一体彼女は何人かと疑っ

てしまう。

璃奈は編み込みを素早く解き、いつもの髪型に戻す。黒いピンと黒いリボンの、かなり地味な組み合わせだが、それが嫌味なくらい可愛らしく見えるのだ。

次いで突然鞆に手をつ込み、何かのケースを取り出すと、眼球に指をつっ込みコンタクトを外す。現れたのは強い光を放つ金の瞳だった。

因みにこの中にコンタクトの使用者はおらず、コンタクトを入れた瞳がどのようになっているかを知らない。

「…やっぱカラコンだったんだ」

「はい。王共莫先輩もカラコンにしたらどうですか？その目、極端に光に弱いんでしたよね」

「でも高いじゃん」

「特注であの眼鏡作るよりかかりませんよ」

さしもの璃奈もいささか呆れたようだ。

「幾ら？」

「ソフトの使い捨て、1DAYでも2Weekでも一ヶ月でも。よければ差し上げますよ」

敢えて値段を言わず、しかも滅多に見ない笑顔で隠した。王共莫は呆然と頷いている。

綵菟は溜め息をつくしかなかった。所詮、彼女に勝てる人間などいないのだ。

「取り敢えず、考えられるのは第一に十鬼島とく鬼じまの十鬼の一人、朱華しゅかですね。こちらは島をでて東京に下宿しています」

「十鬼島って？」

「長崎の小島です。鬼と呼ばれる特殊能力を持った人間とその一族が暮らしている、まあ雪廻町よりも閉鎖されたところみたいです」

「璃奈ちゃんってどんなルートを持っているのさ」

「長崎市と東京都全域にハッキング掛けました」

璃奈は周りに政府関係者、それも要人がいるのにも関わらず、臆することなく口に出す。綵菟にはまず真似できない行為だ。

「心配しなくても、ハッキングしたのは私の兄ですので大丈夫ですよ」

「…そういう問題じゃないけど」

「ハッキングって言ったって、長崎市も千代田区も私の作った安いシステム使ってますから証拠を消すのは簡単なんですよ」

さらっと更に恐ろしいことを言う。綵菟の記憶だと、行政機関のパソコンのシステムは最新型の筈だ。それを事も無げに作ったと言ったのけた挙げ句に安いとまで言う。一体璃奈の頭に何が詰まっているのか、最早歩くブラックボックスだ。

そう。綵菟は嘆息する。自分という存在に干渉してくる唯一の存在が、彼女なのだ。

柚弥や睦瑳とどんなに肩を並べても、王共莫や羽越と過ごしても同列なのだ。それなのに、彼女は自分の更に先に居る。そうだと分かるのは、彼女の頭の良さだとかそういうものに起因するわけではないのだ。

璃奈は綵菟と同類なのだ。綵菟が今止まっている部分と同じところで、彼女もまた躓いたのだらう。同類は分かるものだ。綵菟には嗅ぎ分けられる。璃奈にはそれと分かる貫禄がある。

璃奈はきつと昔に苦しんだのだらう。普通に居たいのに、根本的な毛色の違う自分の存在を持て余していたに違いない。

綵菟は一見老成されているようでいてその実かなり若い。存在に躓くのは、それが思春期だからだ。生きる術が見つからないからだ。或いは、大人の階段を上っているからでもある。

だからこそ、何も語らないが彼女を尊敬しているのだ。

「それと、こちらは九州の方ですね。確定はされていませんが、あ

こちらの方面の組織が東京方面へ向かってきているようですから……注意が必要かと。もしかしたら尖兵の仕業とも限りませんので」

そう言って差し出したのは分厚い資料だ。それもかなり古く、黄ばんだ紙は端が丸くなり、角はない。

「これは？」

「家にあつたものです。……保存用に写したものは重すぎたので、これは昔の写本ですが。ここにはその組織の抹殺者リストが記載されています。……予定も、ですが」

璃奈はあらかじめ付箋を貼っていた箇所を指し示す。そこには雪廻町の名があつた。

「……え」

「これは発足当初のもののようですから、つまりは最初からターゲットだったことになります」

璃奈はそこで言葉を呑み込む。綵菟には分かる。彼女は雪營のことも理解しているはずだ。だから敢えて言うべきか否か迷ったのだろう。

「璃奈……一体……」

「時間はもう……ありませんから。あの組織も焦っているのでしょうね。……雪廻町を押さえれば、の望みを打ち砕くことなど容易いでしょうし」

それはほとんど独白だった。璃奈の顔は元々表情筋がないのかという程無表情で、声も何の感情も感じられない無機質でそのくせ抑揚だけはある不思議な声質をしているが、今は瞳にも輝きはない。声は誰を想ってかやるせない雰囲気隠さない。

「……綵菟先輩」

唐突に調子を戻した璃奈が綵菟に話しかけてくる。先程から、王共莫は別な資料を分析しているし、優太は疲労で寝てしまっている。気兼ねのない状態だ。

「お願いがあります。雪營を……護ってください。珂欄と瑞木が。雪廻町だけは護らなくてはなりません。あそこを壊されたら、終わっ

てしまうから。…あの組織はまだそれに気付いていない……………」
「終わる？」

「…。全てが……。全ての想いが壊れてしまう。生きられなくなってしまう。…せめて、春まで……………」

そうやって綵菟に頼み込む璃奈は、とても必死だった。

「どうして春まで？」

「……………」

璃奈は黙り込む。そこはもう綵菟の踏み込んでいいラインを越えているようだった。

「なあ、綵菟。お前が見誤るなんて珍しいな」

沈黙が降りてしばらくして、ようやく一段落したのか王共莫が呟く。午後の強い日差しが王共莫の黒く染めた髪を元の色へと戻す。

王共莫の髪は天然の金髪で、高校に入ってから染めていたらしい。

「…もったいない」

「…は？」

思わず本音が零れる。綵菟の髪が赤いように、睦瑳の髪が青いように、王共莫には金髪が似合う。人にはそれぞれ向いている色があるのだ。それをすら許さない古めかしい学校という体質が、綵菟はやはり少し好きにはなれない。

「もったいないな。せっかく綺麗な色だったのに。隠さなきゃ生きていけないなんて……………」

「綵菟。別にこれは…じゃなくて、お前ホントにどうかしたか？」

「どうもしてない。本当にもったいないと思うよ…。その色だったら、多分まだ青のほうが似合う。顔に性格でてるから」

「うつせえな。お前、ホントに頭のネジ飛んでやがんな？珍しくトチったからって……………」

苦笑しながらも頭を撫でてくる王共莫の繊細な指が温かく、綵菟

はまだ自分の居場所があったことにひどく安堵した。

情報収集へ下（後書き）

璃奈の翳りは敢えてスルー。（今回は）メインじゃないんで。

しかし、まだまだ全然序盤……。お陰で一年以上も経つのにホラー要素が少ない…。

いつになったら話が進むんだか。気まぐれなんでまだまだかかるんでしょうけど……………。

人にはそれぞれ別の顔がある（前書き）

自分に無理難題をふっかけまくっていて更新が遅れました。
まあふっかけたヤツは全てボツりましたが。

人にはそれぞれ別の顔がある

「じゃあ、一番は朱華ってことでいいんだな？」

「はい、綵菟先輩。…今のところは、ですが」

ようやく本題に戻り始めた。

それぞれに飲み物を追加し、落ち着いてきたところだ。既に店に入ってから二時間は経過している。客も入れ替わり始め、小休憩しに来た中高生が自分達に注目しているのを綵菟は感じていた。

「あれって、香月君たちだよな」

「うわあ、あの面子って久々に見た。…にしては、瑞木君とか真名部君とかいないよね」

「しつ。馬鹿。…きつとあれでしょ。こないだ相良っちが亡くなっ
たから……」

「でもそれで睦瑳君がいないってのはおかしいでしょ」

「じゃあ何やってんだろ」

「さあね。確かに目の保養だけど、信じられないくらい頭がいいし、何考えてるか分かんない」

「あー、分かる分かる。何かこうも天才ばっか集まってるってことは、あたし達が詮索するだけ無駄ってかんじ」

どうやら個人でいるときはともかく、集団になると自分たちの存在は敬遠されやすいということは綵菟も気付いていた。それだけに、実際耳にすると居心地が悪い。

思わず溜め息をつく。璃奈が資料を差し出してくる。

「綵菟先輩。この資料は差し上げます。…そろそろ出しましょう」

「あ、うん。…次はいつにしようか……」

「私は皆さんの予定に合わせますが」

「王共莫、お前の予定は？」

視線を向けると、王共莫は都内の地図を広げている。

「ん、とりあえずそろそろ中間だし一応シフト減らしてもらってるから、俺はいつでも」

王共莫の家は極貧といっているくらい貧しい。住んでいるのは築四十年は経過しているようなボロアパートだ。

とりあえず奨学金のお陰で助かっているので、大学へ行くための資金を貯めているらしい。王共莫の兄たちもまた、そうしたという。

「優太は？」「僕も部活入ってないし、いつでも…」

「…じゃあ、次の水曜はどうだ？」

「…」……絶対地下になる」」

クリムタには一階のカモフラージュ用のカフェと二階の専用カフェに加えて、地下にもバーとカフェがある。二階が満席になると地下へまわされるのだ。

不自由はしないが、やはりどうせなら二階のほうがいいというのは共通認識だ。

「……家ならいいですよ？」

璃奈がさりと言った。

「璃奈ちゃん家？」

「はい…羽越先輩は知っていますよね？」

そうやって優太を見つめる璃奈の目はどことなく不穏な空気を纏っている。

見つめられた優太も気まずそうに視線を逸らしている。血の気の失せた唇は震えているし、歯もガチガチと鳴っている。僅かに漏れ聞こえる声はどう聞いても“本”としか聞こえない。

「璃奈ちゃんの家か」。そういえば知らないな」

「家なら資料もわざわざ持ち出す必要ありませんから。食事くら

いは用意できますよ」

「悪くないね。…睦瑳にも声を掛けておく」

「是非そうしていただけると助かります。…じゃあ、王共莫先輩にもコンタクト用意しておきますので」

若干一名を除いて綵菟たちが和やかに談笑していると、不意に王共莫の携帯電話に着信があった。

綵菟にとっては王共莫が携帯電話を持っていたのが驚きだったが。

「あ…、ごめん」

ダークブルーの携帯のフリップを開いて王共莫が電話に出る。

「もしもし、玖璃兄？どうしたの？」

電話に出た王共莫は弟モード全開だ。普段は見られないその姿に、一人っ子の綵菟は何となく寂しさを感じてしまふ。きっと、頼れる兄弟がいるというのはいいことだ。

「…え？うん……。今クリムタだから…。うん、そう。綵菟とか璃奈ちゃんとか……」

どうやら一番上の兄と会話しているらしい王共莫の顔は穏やかだ。綵菟たちにはそう見せることのない表情に、共通するものを感じる。

（…同じか）

見せる表情は違っても。

綵菟が鳳征に見せる顔を睦瑳たちには見せなかったように、王共莫も家族にしか見せない表情を持っている。

（…なら、璃奈は？）

中3の三学期、ほんの少しだけ璃歩共に過ごす璃奈の姿を見た。だがその表情や雰囲気にかしらの変化が生じることはなかった。そういった空気には滅法敏感な綵菟が感じなかったのだから、多分それは本当だ。

璃歩と話す時の璃奈は、綵菟たちと接するのと寸分変わらない表情だった。むしろ、クラスメイトと居る時の表情の方が面映ゆいくらいに老成されきった表情を浮かべる。

対照的に璃歩は誰に対しても明るい。多少気後れしたりすることがあっても、澆刺とした印象を受け手に与える。

それは本人の資質の差というより、環境の影響が強いように綵菟は感じていた。

璃奈は学校と外では歩き方が全く違う。学校では静かに音一つ立てずに歩くし、歩調も人並みだ。だが綵菟が以前目撃した時などは、肩で風を切る見事な軍人歩きだった。

威圧的でも偉そうでもなかったが、妙に速いその歩調はそれだけで競歩選手に優るとも劣らないスピードだった。

あれが地なのだろう。

一方の璃歩は凡庸とは聞こえが悪いが、本当に普通の歩き方だ。ただし璃奈同様足音はない。

そんなことをつらつらと考えていると、璃奈の携帯も鳴り出す。アラベスク一番だった。

『はい。…ご無沙汰しております、少佐』

いきなり英語だ。そして堅苦しい。

『……はい。その件は……。いえ、今出先でして……。ええ、また後で資料を転送しておきます。……え？いいえ、そんなこと……』

なめらかなクイーンズイングリッシュ。以前も同様のことがあったが、その時はネイティブでおまけに訛りの入ったアメリカングリッシュだった。普段の璃奈からは到底考えられないようなスラングの連発に、流石の綵菟も少し引いたぐらいだ。

多分璃奈は相手によって少しずつ違った対応が違うのだろう。ちらりと伺っても、いつそ不自然なくらいに自然だった。

だから、璃奈が璃歩にとる態度もきつとそれが璃奈にとっては自然なのだろう。

ほっと吊り上げていたらしい目尻を下げると、璃奈が電話をしながら綵菟を訝し気に見る。

そして次の瞬間だった。

「……え、ドッジボール？組分け？……やっぱりそれなら普通に打ち上げパーティの方がいいと思うわ」

突然電話相手が変わったのか、いきなり日本語だった。しかも相手は少なくともかなり親しいらしい。

綵菟はますます璃奈という存在が分からなくなった。

「。何の打ち上げだと思う？」

王共莫がこっそり耳打ちしてくる。

「……さあ」

先程の電話では少佐と言っていた。そこからキャッチの雰囲気もなく、恐らくは何処かの軍関係だ。そこでの打ち上げなど、想像がつかない。

「ええ。そうね……まあ、いいでしょうけど……他の皆は何て言っているの？……え、浅草？それは確かに妥当だとは思うけど……いいの？任務とか」

一体何処の外人部隊なのか。

「別に私は伊豆でも構わないし……。熱海でも箱根でも……」

もはや軍の打ち上げというより老人の温泉旅行だ。今の時季は丁度紅葉も綺麗だろうが。

ますます璃奈という人物が不明だ。

「あ……中尉……。お久しぶりです」

電話はまだ切れる気配がなかった。

人にはそれぞれ別の顔がある（後書き）

王共莫の兄貴は玖璃と怜さとしと言います。

璃奈には他に兄が二人、大輝と響、弟が剛ごう、それと従妹が璃梨と
いうのがいます。

まあそれとは別にもう一人臻彌しんやという弟もいますが。

ほんと、わけのわからん設定ですみません。（主人公でもない
のに）

璃奈の影（前書き）

…。

放置して再開してみればあら不思議。

どこをリンクさせていこうか悩んでいた部分がさっさと解決

まあ、自己満でしかありませんが、どこがリンクなのかは一発で分かります。

璃奈の影

長かった璃奈の電話が終わる頃には既に客で一杯になっていた。その喧騒のお陰で、璃奈は気兼ねなく電話していたらしい。

その様はまさしく戦争だった。

流石に相手側の携帯なり受話器なりの通信機器の奪い合いに銃声が聴こえることはなかったが、時々ドスンだのバキッなどの怪しげな物音が綵菟まで届いていた。

軍隊とは実に恐ろしい。そして、それを平然としてスルーした璃奈も。

「……決着はついたのか？」

「……あ、はい。一応……」

璃奈の顔が心持ち暗い。普段から明るいわけでは決してないから、それは綵菟の見間違いかもしれないが。

「一日目が普通の打ち上げで、二日目がドッジボール大会、三日目がカラオケ大会、四日目がビーチバレー大会だそうです……」

璃奈は言い終えて盛大な溜め息をついた。やはり綵菟の見間違いではなかったらしい。

しかし、璃奈が質問に答えたのは驚きだった。璃奈は綵菟の目から見ると大量の秘密を持っているように映る。多分璃奈が今見せている顔とは全く別の顔が幾つもある筈で、今回もその一つだろう。

『二ノ宮璃奈』という名前が偽名の可能性だってある。それくらい、璃奈の影は濃い。

「ていうか、何の軍？」

優太が不思議そうに尋ねる。

当たり前なことだが、一般の中学生が軍に入隊していることはま

ずない。日本人なら尚更だ。だが璃奈ならそれをおかしいと感じさせないものを持っている。

「……あ、そのことですか」

尋ねられた璃奈は至って平然としていて、明るく煌めく理知的な双眸も穏やかに凪いでいる。

綵菟は璃奈の瞳が時に異常な覇気を湛えることを知っていた。多分誰も逆らえない、それは絶対者の気だった。

今はその色はなく、泰然自若としている。

「まあ、少々訳アリの人間ばかりが集められた掃き溜めというか、風溜まりというか……。そんな部隊ですかね」

「……さっきの」

「まあ、反りの合わない人も居ますから。ただの喧嘩です」

璃奈は事も無げに言い切った。いくらヤクザやマフィアでも、仮にも味方相手に平気で銃を抜くことはないと綵菟は思っているのだが。

「そんな顔しなくても大丈夫ですよ。銃口を見て避けるくらいの能はありますから」

いくら訓練された兵士でも普通は味方に銃を向けられただけで怯む気がするのだが。綵菟は自分の感覚がおかしいのかと不安になつて優太を見るが、元より綵菟より遥かに繊細な優太が付いていけているわけがなかった。

仕方なく王共莫を見るとまだ話中のように、何やら苛々とテーブルの上で右手の指が踊っている。

璃奈の価値観は根本的に違う。だが事実に基づき自信を持っていることも、綵菟も同類として理解はできる。

最後には結局、自分を信じることしかないのだ。

綵菟は一つの区切りを付けて璃奈に視線を戻す。

そして軽く息を吸い込むと、

「り……」

「はあああつ、白木原で!？」

店内に響き渡る王共莫の声に綵菟は続く言葉を吞み込む。

「王共莫先輩?……白木原で何か……」

白木原とは苗字ではなく学校名だ。男子校で約3分の1が幼等部からのエスカレーターという閉鎖的な場所だ。寮制がないのが唯一の解放かもしれない。

だが、王共莫と何の関係があるのか分からない。少なくとも白木原に進学した同級生はいない。

「璃奈ちゃん……。まずい、あそこのボンボン共がこぞって逮捕だつて!！」

「「は!？」」

もはや今日一日で綵菟は何回驚いたか定かではなかった。

「王共莫先輩、一旦出ましょう。……璃奈さんがいる事務所に連絡が来たんですよね？」

「うん。……各界の著名人たちの子供だったり孫だしね。璃璃兄も断り切れなかったみたい」

「……分かりました。璃奈さんの所へ行つた方が良さそうですね」

荷物をまとめ出す璃奈の声音が微妙に変化してきている。綵菟が見上げれば、そこにはいつか見たのと同じように、絶対的な煌めきを帯びた双貌があつた。

その美しさに、さしもの綵菟も息を吞む。それはとても、15歳にも満たない少女が持つ貫禄ではなかった。それに圧倒される。

「でも……」

反論しようとする王共莫に、璃奈は会計を済ませながら言い募る。

さりげなく全員分の代金を支払うそのなさには可愛げがないが、スマートで嫌味がないのは璃奈の美德だ。

「玖璃さんが忙しいからこそ、私たちが彼らが報復を始める前に対策を取らなければなりません。…下手な対処をすれば間違いく玖璃さんの事務所は壊滅させられます」

「璃奈ちゃん……」

「…綵菟先輩と羽越先輩もいらっしゃいますか？」

璃奈は王共莫との会話を打ちきり、綵菟たちの方を向いてくる。

こうなった以上、肯定しない手はなかった。

それが璃奈の手法であるのか、それとも天然の策士なのか、綵菟にはいまいち分からなかったが。

少なくとも璃奈は猫を殺したりはしない、という信頼ならある。虜にされた時は、その時だ。

璃奈の影（後書き）

あれですね。

もう展開が…ホラーじゃなくて璃奈の人身掌握術の公開…。

璃奈の過去は十分にホラーでミステリーでサスペンスなんですけどね…。

ちらっとネタバレ（…になるかどうか）すると、璃奈は偽名です。そしていっぱい人を殺しています。朱華なんて可愛いほうです。

綵菟は一応主役です。どんなに喰われて、いいように操られていても主役です。

…きつと一年後には活躍するに違いないっ（遅っ）

過去の片鱗と親友（前書き）

王共莫が少々暴走します。

過去の片鱗と親友

地下鉄を利用して綵菟たちが着いたのは、新宿にある『榎木法律事務所』という場所だった。

「玖璃兄はここで働いてんの」

事も無げに言いながら、王共莫は暗証番号を入力していく。立派な自社ビルからは、一般人を寄せ付けないオーラが感じられた。

「王共莫さん、こんにちは」

スーツ姿の似合う、いかにも秘書然とした女性が王共莫に会釈をしてくる。

「どうも、神崎さん」

「いえいえ。璃奈さんもこんにちは」

「ご無沙汰しております」

璃奈が優雅に一礼すると、神崎という女性は苦笑して頷く。

「今日は…お兄さんのところへ？」

「うん。ちよつとね」

「手伝えることがあったら言ってね」

そう言って歩き去る姿は美しく決まっている。

「今のは？」

「ああ、神崎さんは昔からの知り合いで…」

「ふうん」

特に勘ぐることもなく、エレベーターに乗って三階まで行く。

「ここ、玖璃兄とかの専用の階だから。盗聴とかはない方がいいよね？」

「そうですね。クライアントの件でもありますし」

その会話はごく自然で淀みがない。綵菟はそんな世界で生きてきたのだと納得した。

「おや、これは勢揃いだね、王共莫」

「玖璃兄！」

王共莫が玫瑰の姿を見ただけで犬のように飛び上がる。綵菟は尻尾まで見えてきそうで怖くなった。

「璃奈ちゃんも久し振りだね」

「そうですね。お久し振りです、玫瑰さん」

「またアノ人に迫られたらいつでもおいで。…法で裁くから」

「ありがとうございます。…でもその場合、また玫瑰さんが危ない目に……」

「まあ道前寺の人間だし危険かも知れないけど、それはほら……」

「「ロリコン」」

玫瑰と王共莫がテノールとアルトでハモる。

綵菟は三人の話題には加わりたくなく、玫瑰の容姿を見ていた。

玫瑰の身長は高く、王共莫のはるか上に行く。王共莫が若干女顔のきらいのあるキツめの顔なのに対し、玫瑰は柔らかさを持ったエグゼクティブの風格があつた。六畳のボロアパートで家族三人がひしめき合っているようには到底見えない。

(……………)

綵菟は少々羨ましく、面映ゆかった。

綵菟の家は閉鎖された町の中とはいえ、実に恵まれている方だ。

少なくとも、両親も祖父母も生きている。

王共莫たちの両親は幼い頃に殺されたらしい。それなのに、彼らは強かで明るい。

(俺の悩みなど……………)

ほんの微々たるものだと思つた。

確かにいつ殺されるとも判らない危険性は、一般人より高い。高いけれども、それ以外の危険は皆無だ。紛争地域に育つよりも、明らかに普通で幸せのはずだ。

能力があるから何だというのだろうか。

今の綵菟にはそう思えた。

(璃奈は……………)

多分綵菟よりもあらゆる面で強い。それは自分の能力で分かる。

璃奈の気配は底知れず深く、混沌としているようでいて、しかしながらそれは複雑で精緻なひとつの絵を映し出す。

(……………！)

綵菟に見えるのは、黒いコートと一枚の金貨だった。それが何を象徴するかは全く分からない。だが、少なくとも璃奈の過去に関わるものだという予感があった。

(どうということだ……………？)

気配に漏れ出るほんの微弱な過去の片鱗については、綵菟はほとんどの人間から読み取ることができる。だが璃奈から感じたのはこれが初めてだった。

それは読み取れない例外なのだと思って気にしていなかったが、今は読み取れる。綵菟はそのことに違和感を感じていた。

綵菟は更に神経を集中させる。

他に見えてきたのは、よく分からない枝状の『何か』と、巨大なパラボラアンテナだ。

いよいよもって意味が分からない。そんな謎などどうでもいいことは、綵菟も本当は分かっていたのだが。

「綵菟、大丈夫？」

気付けば優太のくりくりと丸い目が覗き込んでいて、綵菟はそこでようやく現実に戻った。

「やっぱいろいろあって気を張ってたろ。……………ここでしばらく仮眠してけば？」

「いや…、考え事をしていただけだから」

「お前はいつも考えすぎなんだよ。少しは能天気になればいいんだ」
王共莫が綵菟の髪を掴む。綵菟はそのまま問答無用とばかりに仮眠室のベッドに押し込まれた。

「王共莫、何を……………」

綵菟が恨みがましい気持ちを抑することもなく見上げると、王共莫は普段から悪い目付きを更に悪くして完全に綵菟を見下していた。
「寝ろ。何も考えずに寝てさっぱりすりゃ味覚も戻る」

「え……」

綵菟は冷水を浴びせられた気分だった。

「気付いてねえと思ったのか？ あんなどうでもいい顔でちびちび小鳥が啄むような食い方するようなお前見てると腹が立つ」

「……」

指摘されて、綵菟にはもうぐうの音も出ない。悔しいが王共莫は飲食店でバイトをしているだけあってその観察眼は確かだ。

「その様子じゃ朱華とか何とかに殺られるのがオチだ」

「……」

「ついでに胃潰瘍とかウイルス性腸炎とか、その内に起こるぞ」

王共莫の完璧な厚さを持った唇の端は上がっているが、淡い色の瞳は人形のように無機質で冷徹だ。綵菟は初めて親友の新たな一面を知った。

「……分かってる。でも、当事者じゃないお前には分からない……」

予知という能力を持ちながら、いざ親友の死には全く間に合わなかった無力感など。ましてや、睦瑳が雪營に気に入られているからと言って無責任に罪を押し付けられていくのを、その傍らで見ているしかない自分の立場など。

「その言葉、もう一度言ってみろよ」

恐ろしい程の静寂と、異様な程表情のない王共莫の人形めいた顔。その瞬間、綵菟は間違いを悟った。

過去の片鱗と親友（後書き）

次は璃奈視点です。綵菟と王共莫がケンカしている間の話になるかと。

全然進まずに夏休みが終わっていく……………。

璃奈と玫瑰（前書き）

璃奈視点で書いたら大変わけの分からない展開になってしまいました。

特に気にせずさっとお流し下さい。

璃奈と玫瑰

「あーあ、行っちゃったね」

「あの二人ですから大丈夫ですよ」

璃奈は特に心配はしていなかった。悪いのは綵菟だが、王共莫がそんなことで見捨てるような性格をしていないことなど分かっている。

玫瑰が持ってきたアールグレイに砂糖を入れながら、璃奈はしばらくぼーっとしていた。

（…どうも苦手ね…）

璃奈はアールグレイは全くとっていいほど嫌いだった。自宅で育てていないこともないが、専らお菓子の中だ。

玫瑰にはさんざん世話になっていて、もしこれが仮に悪質な嫌がらせだとしても、璃奈は文句は言えないので、黙って甘味で誤魔化していた。

「戻ってくるまで待つた方がいいのかねえ」

「あの様子では日が暮れます。……始めましょうか」

頭を切り替える。それをするには、砂糖の糖分が丁度よかった。

「まあ王共莫もまだ見習いだしね」

「ポテンシャルは玫瑰さんより高そうですね」

「手厳しいね、君も。そんなんだからあの男がいつまでも離れないんじゃないか」

璃奈は軽く頷く。そんなことは前世の昔から分かっていた。『彼』に愛情を向けることはできないから振り続けて、一体何回振ったのかも曖昧だ。

「でも一応、王共莫さんにも関係しているんですよ……」

「白木原に同窓生がいるとか？」

「それは把握していませんが…、羽越先輩は何か知っていますか？」

「そうだなあ…、多分いないんじゃないかな。あそこって高等部の

編入枠って100人まででしょう？大体、ウチか緋凰に流れるかだしね」

「そうですね、男子校ですし」

「じゃあ、王共莫が関係しているというのはどういうことなんだ？」

「王共莫さんのバイト先のオーナーが被害者の実の兄なんです」

それを当人が知っているかどうかは分からないが、少なくとも事実である。

「それは…ややこしいね」

「ていうか璃奈ちゃんはどうからそんな情報を仕入れてくるのさ」

「これは単に彼らの真ん中の兄弟に聞いただけです」

「単につて……」

羽越が微妙な顔をするが、それが事実なのだ。まさかその彼が影ながら大切にしてきた弟が刑事事件に巻き込まれることを璃奈が想定していなかっただけで。

「取り敢えず、その被害者の名前は玖月香雪。白木原の二年生」

玖璃が気を取りなおして始めた。確かに、話の腰を折りまくった自覚くらいは璃奈にもあったので、大人しくしている。

「今回のクライアントは火崎無月。こっちは一年生。で、これはやっぱり受けるべきではないと？」

「当然です。彼はアメリカと繋がっていますし、薄々ですがEAについてでも気付いているようですしね。大体に於いて被害者の香雪さんも強かですし、どう足掻いても7、8年は刑務所生活ですしね」

「どういう意味かな？」

「EAの方で蓄積していた彼らの不正行為の証拠を警察に全てリークしています。……ついでに親の方のも、警察が一切関わってないものは全て」

その辺りの力の加減は、データをまとめた別の人物が称賛に値するだろう。それが香雪本人なのか他のEAなのかは定かではないけれども。

「逃げ場はないね」

「後はマスコミ次第ですね。…上手く煽れば少なくとも彼らが社会復帰することはないでしょう」

「上手く、ね。君は少々悪人すぎるよ?」

と言いつつも、玫瑰の目は笑っていた。

璃奈はそれに軽く笑って応えた。

それに当然、璃奈は善人ではなく完璧な悪人だという自覚がある。多くの人間を踏みつけてにじりつけて、そしてそれらを積み上げてようやく自分という存在があるのだ。多少の情など切り捨てるのは容易いことだ。

そしてそれ以上に、腐敗した人間をいつまでも権力の座につけておくことほど璃奈の精神を逆撫でするものもない。

璃奈は容赦するつもりは毛頭なかったのだ。

「悪人で結構ですよ。少なくとも、彼らほどではありませんから」

「よく言うよ。君が殺した人数より彼らの犯罪の方がはるかに少ない」

「別に殺してはいませんよ。社会から抹殺しただけです」

「戸籍のない人間は、死んだのと同じだろう?」

「……そういうわけでもありませんよ」

戸籍の復活など、本人が死んでいないことを証明できれば容易いことだ。それをせずに安全な場所でのうのうと暮らしているのは単に彼らの意志に他ならない。璃奈はそう思っていた。

（殺すのは…最終手段だわ）

実際は殺すことのほうが簡単だ。守りたい命はいつも璃奈の手を滑り落ちて、亡くしてから失ったものの大きさを思い知らされる。

（だから……）

せめて、自分が手を掛ける者全てのその刹那の表情を刻み付ける。それが璃奈なりの解決の仕方だ。自己満足でしかなくても、何もせずに感情のない殺人鬼に成り下がるのだけは厭だった。

沈黙の降りた部屋で優太だけが一人、おろおろと行き場がなかった。

璃奈と玖璃（後書き）

えーっと、申し訳ありません。

E Aとは自分で脳の中の情報を整理したり調整したり、知的生命体と交信して知りたい情報を引き出してしまっ、変わった人たちの総称です。（後半は？です）

綵菟たちの能力とは違います。

でも綵菟も璃奈もE Aです。

なんかオカルトに流れてる……。

王共莫と璃奈へ上《（前書き）

なんかいろいろごめんなさい。

六月修正完了とか嘘ついてごめんなさい。

九月になってもこんなでごめんなさい。

では、どうぞ。

王共莫と璃奈へ上

「ほら、もう一度言ってみろよ綵菟」

王共莫の声はどこまでも冷えていて、綵菟の胸に突き刺さる。

「俺だつてな、柚弥が死んだの知って悲しかった。学校の奴らが死んでくのが辛いのは…皆同じだろ？ ……無力なんだよ、皆。だから、一人で溜め込んでばかりしないで相談しろよ」

「王共莫……」

「それに、璃奈ちゃん目指すのは阿呆だぜ？」

王共莫が心底馬鹿にしたような目で見てくる。

「今まで生きてきた過程も思考回路もスキルも、敵わねえことくらいお前も感じてんだろうが」

指摘されれば頷くより他はない。背が異様に高く、奇抜な色をした髪を持ち、とにかく目立つ彼女ではあるが、中身は更に異常だ。

「璃奈に…妙な影が見えた。多分、そういうことだ」

「ならしつかりしろ。溜め込んでんじゃねえ」

王共莫はそう言つてパイプ椅子に乱暴に座る。無音の室内にギシツと悲声があがったが、勿論二人ともそんなことは一切気にしない。「…迂濶に動けないのも、お前が歯痒い思いをしていることも、璃奈ちゃんを知ってる。雪廻のことも知らないほど、この問題を甘く見てもいない」

「…そう、だな」

「俺からはそれだけだ。お前はまず食つて寝る。話はそつからだ」

王共莫はそれだけ言つて仮眠室を出た。

残された綵菟は溜め息を一つ吐き、大人しくベッドに横になった。

時計の針が時を刻む音だけが聞こえる室内で、綵菟は思い出を辿っていた。

（璃奈、か…）

中学の頃は、ただの大人しい後輩だと思っていた。上背はあっても、全体的に華奢で、とてもじゃないが運動なんて出来そうになかった。長すぎる手足を持て余す姿は不器用そうで、実際に段差で躓いているのを見ると滑稽に思ったりもした。

モデル体型と言うには痩せすぎていて、表情にも覇気がなく、人形のような。兎に角、異質な存在だった。

だが学年の違う綵菟にとっては、接点がない以上は取り立てて気にする存在でもなかった。

璃奈が転校してきて、初めての定期テスト。璃奈は一位を取った。綵菟たちが通っていた中学は指導要領が独自のもので、それ故に無駄にレベルが高い。

璃奈は平然としていた。つまり、彼女にとっては当たり前だったということだ。少なくとも、綵菟にはそう見えた。

超然とした態度には驚かされたが、ガリ勉から来る自信とも取れた。

それから直ぐに体育大会が開かれた。驚くべきことに璃奈は長い手足を存分に利用して、クラスに勝利をもたらした。

普段の不器用そうな動きは演技なのかと疑ってしまうほどに、彼女は豹変したのだった。

見るからにひ弱そうな身体から溢れ出すエネルギーは学校を覆い尽くし、支配した。

そうして、璃奈は二学期が終わる頃にはすっかりアイドルとなっていたのだ。

しかし璃奈はまるで台風の目の如く、表情には相変わらず覇気が

なく、いつも無表情が困惑している様子しか見掛けなかった。

そんな璃奈とのファーストコンタクトは、三学期に訪れた。

璃奈が学校行事の一つ、冬山ハイキングで何故かクラスメイト数名と行方不明になった事件の後だった。

不思議なのは事件から一ヶ月後に見つかったことだ。

彼らは何も語らなかったし、受験シーズンで三年生が関わることも赦されなかったので詳しいことは知らない。

それは、それぞれがそれぞれの思いを抱えて、志望校の結果を待っている時のことだった。真冬なのに、コートもなしに屋上で一人弁当を食べていたところに、綵菟は出くわしたのだ。

屋上に行ったのは、本当に偶然だった。

琳鋭の受験は私立ということもあって、早めに終わっていた。一方で優太を始めとする多くの生徒が受ける星条は、奇妙なことに卒業式が終わった後に一次があるので非常にピリピリしていた。

早い話が、邪魔をしないように出てきただけ。睦瑳と柚弥も同じ理由でそれぞれの教室を出てきて、行く宛もなく自然とそんな流れになった。

扉を開けたままの格好で呆然と立ち尽くすこちらを、いつもの何を考えているのか分からない表情で、ぼーっとこちらを見ている璃奈の弁当箱は何故か重箱で、相当な量だった。しかも湯気まで出ていた。保温可能な重箱なんて見たことがない。

あまりに可笑しくて、一緒にいた睦瑳と柚弥と三人で吹き出してしまった。

『その量一人で食べるのかよ。男子並みだな』

一年も経っていないけれども、この頃の綵菟は丸つきり“中坊”だった。それだけのことだった。

璃奈はそんなからかいにも応じず、相変わらず無表情のまま、こちらを真っ直ぐに見据えて口を開いた。

『食べますか？今日は皇先生がお休みだから、私には少し多くて…』
それはてつきり、その重箱のことだと思っていた。まだ半分以上

残ったそれは、確におかしな点があった。

（お握りじゃなくて白米だったしな）

璃奈は鞆から、和柄の巾着を差し出したのだ。つまり、重箱一つで一人前。巾着の中身は標準サイズの弁当箱だった。

『三人分ではないですが：よろしければ』

なんだか圧倒されてしまつて、三人は弁当箱をつついた。

手作りだというそれはどれも絶品で、うっかり重箱の方も見つめてしまう程だった。

厚かましくも食後のお茶も分けてもらいながら、すっかり打ち解けた様子で柚弥がどうして屋上なのかと訊いた。

手が悴んで箸が握れないくらいなのに、なぜ璃奈はこんなところにいるのか。

すると璃奈は微笑して、答えてくれた。

『桜が見たくて』

その時にはもう、ガリ勉少女だという印象は綵菟の中にひと欠片も残っていなかった。

王共莫と璃奈へ上（後書き）

うん、昨日投稿した桜の幻想よりはましでも短いですね。
《上》とか区切ってんじゃねーよって感じですね。

でも区切りたかったんです。構成的に。

《下》では過去の王共莫も出てきます。

展開も更新も温いですが、頑張ります。

というか、桜の幻想では書かなかったのですが、小説を放置しない
ためにくじ引きで書くことにしたのです。
次に当たったときには速やかに更新します。

でもくじ引きに飽きたらまた亀かもしれせん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2889d/>

報復

2011年4月11日12時16分発行